幼なじみと妹が居たとする。大切なのはどっち？

十十

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼なじみと妹が居たとする。大切なのはどっち？

【Ｎコード】

Ｎ４２０６Ｚ

【作者名】

十十

【あらすじ】

大切なモノを守るためならなんだって犠牲にする――それが俺の生き方だ。殺し屋である少年の日常と非日常。大切なモノを守るためとは言え、人を殺してしまってもいいのだろうか？　ダメなんじゃないか？　日々そんな感じで葛藤し苦悩する少年の行く末は――。

プロローグ（前書き）

駄文ですが、どうか最後までお付き合いいただければと思います。

プロローグ

闇夜に浮かぶ幾多の摩天楼。
いま俺が視界に捉えているその光景は、夜空に瞬く星そのもののようだ。
逆に、夜空自体には星が一つたりとも存在していない。……温暖化とかフロンガスとかが関係してるのかもな。
結構どうでもいいことを考えながら、俺は腕時計を確認する。
午後一一時二六分。
予定時刻まであと少しと迫り、俺の胸はだんだんと高鳴ってきた。時計のカチカチと動く針を見ていたらさらに緊張してきたため、俺は時計から摩天楼に目を戻す。
うん、やっぱいい眺めだ。俺がいるのは地上一〇〇メートルに位置する屋上で、ここから見える景色は俗に言うあれだよ、あれ……そう！　一〇〇万ドルの夜景って奴だ。見るからに金かかってそうだもんな。……ってあれ？　一〇〇万ドルの夜景の意味って、金のかかった夜景ってことでいいのか？　……ま、どうでもいいや。
にしても寒っ！　Tシャツと短パンなんかでこんな場所に来るもんじゃないな。まだ九月の上旬だからって甘く見てたぜ……。うぅ……寒っ。
地上ゼロメートル地点とはまったく異なる突風吹きすさぶ中、俺はその場で駆け足をしながらもう一度時計に目を向けた。
午後一一時二九分。
「そろそろだな……」
俺がこんな寒空の下にいる理由は、一分後にやらなければならないことがあるからだ。
そのことを考えると、また緊張が湧き上がってくる。寒さと相まって、俺の体は小刻みに震えだした。あ……これはちょっとヤバイ。手元がブレるかも。

しかしそうも言ってられない。これは絶対にしくじれない仕事なんだ。もしも、もしもしくじれば、俺自身が危うくなるかもしれない仕事なんだよ……。くそっ、また震えがきつくなったぜ……。

「……落ち着け、落ち着くんだ、俺」

呟きながら、俺は仕事道具を掴む。三脚によって固定されている――狙撃銃を。

「大丈夫、大丈夫だ……」

自分に言い聞かせるように言葉を発し続けながら、俺はすでに倍率も標準も合わせてあるスコープを覗く。

スコープが映しているのは、とあるビルの会議室のお偉いさんが座る席だ。

さみぃ……くそっ、早く来いよ。これ以上体温が下がると精度が落ち――来た……っ！

心で愚痴をこぼしていると、裕福そうな強面老人がスコープの中央に現れた――と同時に毎度のことながら、俺の中に残る僅かな良心が津波のように押し寄せてくる。

こんなことしていいのか？

こんなことしてなんになるんだ？

こんなことして正しいのか？

こんなことして誰か悲しまないか？

こんなことするのは間違ってると思わないのか？

こんなことこんなことこんなこと……こんなこと……こんな……

……いや違う！　これは何不自由なく暮らすためなんだ！　生きるためなんだ！　……でもそんな自分勝手のために……俺は人をころ……違う！　違うんだ！　これは自分勝手じゃない！　こうしてくれって頼む人がいるから、俺はそうして欲しい人のためにやってるんだ！　自分勝手じゃなくて誰かのためだ！

でも、それが自分勝手につながるんじゃないのか？

違う！　うるさい！　もう何回もやってることだろ！　いい加減にしないと……こんな感情はもう失くさないと……。非情になれ。

非情になるんだ！
何不自由なく暮らすために、それに何よりあいつのために、あいつのために、あいつのために、あいつのために、あいつのために、あいつのためにあいつのためにあいつのためにあいつのためにっ――

俺は引き金を引いた。

刹那――乾いた破裂音が虚空にこだました。
「うぉぇ……」
スコープを覗いていた目が狙撃の結果をバッチリと捉え――結果、そのあまりの凄惨さに俺は思わず胃の中の物を逆流させた。
「うぅ、うぇ、はあ……はあ、あ、ァ……早く、逃げないと……」
ひとしきり吐き終えた俺は、すぐさま銃の収納に取りかかる。は、早く、早くここから逃げないと、立ち去らないと、消え去らないと！
ついさっきまで考えていたことなんてまるで忘れた。一刻も早くここから立ち去ることが、いまなによりも優先しなければいけない行動だから。
罪悪感に浸る暇さえない。
銃を収納し終えた俺は、勢いよく非常階段を駆け下りる。カンッカンッカンッカンッと、俺の逃走ルートを向こうに誇示しているかのような金属音を、立てたくないのだが立ててしまう。実際はそんなに大きな音ではないんだろうが、俺には街中に響きまくっているんじゃないかと思うほどに大きく聞こえる。そして、それがまた俺の恐怖心をあおり、いっそう焦らせる。
俺は下りるスピードを上げた。当然、音はよりいっそう早く大きく聞こえるようになる。プロのドラマーのようなリズム。普段聞けば小気味よく聞こえるのかもしれないが、いまはこの音を聞いた者が報復にやってくるのではないかと思ってしまう。
俺は水浴び後の犬のように身震いをした。
もちろん、言うまでもなく恐怖からだ。

「ハァ、は、ハァ、はあ、ハぁ」
俺はとにかく走って走って駆け下りる。
そうして、途中何度かコケそうになりながらも無事に地上まで走りぬいた俺は、何事もなかったかのように街へ溶け込む。
ここは大都会。地上まで下りてしまえばこちらのものだ。もう次の日になろうかという時間帯だが、人はまったく減らない。むしろ増えているような気がしないでもない。ブロンド超絶美人にマッチョな黒人、俺と同い年ぐらいの少女が男と歩いていたりと、紛れ込むにはもってこいだ。
ちなみに、銃はギターケースの中に入っているからバレはしない。
俺はいま、どこからどう見てもバンドの練習帰りのガキだ。リズムでも刻むかのように頭を振りながら歩く。
しばらく進み非常階段から結構離れたところで、俺はギターケースの肩紐を気にかけるフリをしながらちょっとだけ振り返ってみて――
「うわっ……」
顔をしかめにしかめた。
なんでかって言うと、さっきまで潜伏してたビルの下にどう見ても一般の方ではない黒服の男たちが数人いらっしゃって、獲物を探すハンターみたいに辺りをキョロキョロと見回していたからだ。直立不動で屋上の方を見上げている奴もいる。
ふぅ……危なかったぁ、今回はマジでギリギリセーフだったぜ。あと何十秒と遅かったら俺はいまごろ……蜂の巣で作ったオブジェみたいになってただろうからな。
「はあ……」
俺は肺にためていた空気を全て押し出すように息をはいた。これはため息じゃない。心からの安堵を表現したんだ。
危険な仕事もこれでとりあえずは無事に終了ってわけだからな。
さてと、あとは帰るだけだ……。
愛しいあいつが待ってる家にな。

◎

腕時計で時間を確かめると、すでに一時を過ぎていた。
俺は閑静な住宅街の中を歩いている。まあ、一時を過ぎればどこも大抵は閑静なんだろうけどな。
と、そんなバカな事を考えていると我が家が見えてきた。いや、正確には家っていうか道路に出てる看板が見えてるだけだ。
『ストルス雑務店』っていう看板。
俺の家は自宅を店舗に自営業をやってるんだ。
雑務店っていうのは、要するに何でも屋。
本当は父さんと母さんが営んでたんだけど、その父さんと母さんは一年前に事故で死んでしまった。以来、俺が継いで営業している。
――あ、そうそう。言っておくけど、殺し屋っていう仕事は俺が勝手にやり始めたことで、父さんと母さんは人殺しなんかじゃないからな。
父さんと母さんは、ただ近所の人たちの助けになりたいっていう志の下に何でも屋を始めただけなんだ。だから、父さんと母さんに変な思いを抱かないで欲しい。
蔑むなら俺だけを蔑んでくれ。父さんと母さんの店を汚してしまったのは、紛れもなく俺だから。
だから、父さんと母さんに対して、心の底から申し訳なく思ってる。悪いことしてごめんなさい、人の道を踏み外してごめんなさい、店を汚してしまってごめんなさいって。
悔いても悔いても悔やみきれないほどに申し訳なく思ってる。
だったら殺し屋なんかやるんじゃねえよって思うかもしれないけど……でも、そうしなければならなかった。……でないと生きられなかった。
父さんと母さんが生きている時、つまり、何でも屋を大人二人で切り盛りしている時ですら、家計がそれなりに厳しかったんだ。

なのに、父さんと母さん、大人二人が死んで、俺一人でやり始めたらどうなったと思う？
生活できなかったよ。
俺だけじゃできることも限られるし、そもそも当時中等部だった俺に依頼しようとする奴なんて一人もいなかった。
かなり苦しい日々が続いた。……それが俺一人ならよかったさ。でも、俺には妹のリールがいるんだ。だから、そのリールのためになんとかしないとって俺は考えて、それであちこちから色んな情報をかき集めた。なんでもいいから金になるようなことを必死に探したんだ。
そしたらあった。この時代にも殺し屋っていう仕事が。
最初はやろうかやらないかでもの凄く葛藤したことを覚えている。けど、いま現在の俺を見てもらえば分かる通り、俺はその殺し屋っていう仕事をやることにしたわけだ。
いまでも鮮明に思い出せる。
最初のターゲットをナイフで突き刺した時のことを。罪悪感で満ちたことを。でも、口座に結構な額が振り込まれているのを見て――思わず笑ったことを。
ハハッ、俺はもう堕ちてるんだ。
ダメ人間なんてもんじゃない。もう壊れに壊れて破綻しまくってる。
こんな奴、ホントならリールのそばに居ていい人間じゃない。
でも、俺がいないとあいつはどうなる？
きっと、いや絶対に一人では暮らせない。だってさ、リールはまだ小六なんだぞ？　生活力なんていまはない。
だから俺は、自分が破綻していると分かりながらもあいつのそばにいる。あいつに何不自由ない生活をさせてやるために、俺はそばにいる。これからもそばに居続ける。
それにさ、リールは俺の原動力なんだ。リールがいるから、俺はなんだってできるんだ。逆にリールがいないなら、俺は何もしない

かもしれない。
と、色々考えながら歩いていると、家の玄関前まで到着した。
さぁて、その原動力にもうすぐ会える。俺はほころぶ顔を抑えられない。
玄関の鍵を開けた俺は、もの凄い小声で「ただいま」と言いながら家に踏み込んだ。もちろん返事はない。というよりあったら困る。
なるべく音を立てないようにしながら、俺は二階の自分の部屋へと向かう。
真っ暗な自室にたどり着いた俺は、ギターケースを隠し収納スペースにしまうべく棚をスライドさせる。……スライドって言ったけど、ホントは押してずらしただけだ。一冊の本をスイッチ代わりにしてウィーンって開くとかじゃないからな。
まあそれはさておき、俺は眼前にお目見えしている隠し収納スペースにギターケースを立てかける。ギターケースを収納できるぐらいには大きな空間だ。おおよそロッカー二つ分ぐらいだ。
ここには他にも殺しの道具が隠してあったりする。例えばスタンダードにサバイバルナイフとか、電圧を異常なまでに高めたスタンガンとか、あんまり使わないけど普通のハンドガンもある。武器だけじゃなくて睡眠薬なんかの薬物も揃えている。
俺も一応は殺し屋だからな。それなりに道具集めはしてるってわけさ。けど、今後は特に増やす予定もない。大体は狙撃銃でカタがつくからな。
「んぐっ……」
ズズズッと、用が済んだので棚を元の位置に押し戻す。
隠し場所がそんなところで大丈夫なのかと思うかもしれないけど、心配には及ばない。この家には俺とリールしか住んでないし、そもそもリールにはこの棚をずらす力はないだろうし――ってそうだ、その華奢な体を拝みにいかないと。
俺は抜き足でリールの部屋へ向かう。
あんな汚い仕事をしたんだ。可愛い妹の顔を見て色々相殺しない

とやってられないって話だ。
リールを起こさないようにと、俺は慎重にドアを開けて忍び足でベッドに近づき――目を見開く。
「……あぁ、可愛い」
数時間ぶりに見たリールはとても、それはもう凄まじいほどに愛らしい。
金色の艶やかな長い髪。いまは閉じてるから分かんないけど、開くとめちゃくちゃくりっとしてて猫みたいに大きな愛おしい目。小柄な身体は白を基調としたパジャマに包み込まれている。
外見だけ見ると、天使みたいでどこか大人しそうに見えるんだけど、それはまったく違うんだなぁ。実際は凄く天真爛漫で、この姿とのギャップが最高だ。タオルケットを蹴飛ばしてるのがまた可愛いらしいじゃないか。
俺はそのタオルケットを腹にかけてやり、「おやすみ」と呟いてからリールの部屋を出た。あんまり長居して起こしても悪いからな。
それに長居なんてする必要ないんだ。俺はリールの顔をチラッと見るだけで、それだけで何もかも忘れられるんだ。嫌なことでもなんでもな。それに、俺はそれだけで活力がもらえる。さっきも言ったけど、リールは俺の原動力。いや、原動力なんて表現じゃ収まりきらない。もう端的に言ってあれだ。

リールは俺の全てだ。

これは大げさでもなんでもなく、どうしようもないほどに本当のことだ。少し気持ち悪いかもしれないけど、俺としてはどこまでも大真面目な表現だ。
だって、俺はあいつのためならなんでもする。なんだってできる。
それを証拠に、俺は人を殺してるだろ？　リールに不自由な思いをさせたくないから、頑張って人を殺してるだろ？　もちろん……これからも殺し続けるつもりだ。

俺は……俺はリールのためになるのなら、堕ちるところまで堕ちてやる。俺一人おかしくなるだけでリールが救えるのなら、俺はどこまでだって堕ちてやる。

「……あっ！」

そこまで思考したところで、俺はいまリールの部屋の前にいるということを思い出す。

くそっ！　バカか！　何やってんだ俺は！　リールの部屋の前で汚いことを考えるなって言ってんだろうが！　リールを穢すな！

自分に喝を入れながら、俺は急いでリールの部屋を離れる。

ふぅ……これで良し、と。

さて、俺は殺し屋である前に、ただの高校生でもある。当然ながら明日も学校だ。あーイヤだイヤだ。殺人休暇って制度を導入してくれないもんかねえ。……冗談だから気にしないでくれ。

それはそうと、早いとこシャワー浴びて寝るとするか……。

そのあと俺は、いま言った通りにシャワーを浴びてからベッドにもぐり、あっという間に夢の中へと落ちていった。

人を殺す、という行為をした日は、いつも大体こうして終わる。

1章―1

「ごぉ……っ！」

次の日の朝、俺は腹部にもの凄い衝撃を感じて眠りから覚める。だが、これがなんなのか分かっているので、俺は焦りもせず目を開けるよりも先に声を発した。

「おはよう……リール……」

「おはよう！　フィー兄ちゃん！」

リールの弾むような無邪気な声。俺は毎朝毎朝こうして起こされる。うらやましいだろ！

ちなみに、リールは俺のことをフィーと呼んでいるが、俺の名前はフィーニットだ。

「早く起きなきゃダメだよ。早く早くぅ～」

言いながら、リールは俺の腕を引っ張る。

……ああ、幸せだ。リールの力強い引っ張りのせいで俺はベッドから床に落ちたけど、そんなことは怒る材料になんてならない。むしろ微笑ましい限りで、俺の顔は自然とほころぶ。

と、なぜか分からないけど、リールが初等部の制服のスカートを急に押さえ始めた。

どうしたんだろう？　と思っていると、リールが顔を赤くしながら言葉を発してくる。

「ふぃ……フィー兄ちゃん……わ、私のスカートの中見て笑った……」

ああ、なるほど。俺の微笑みをパンツを見て笑ったと捉えたのか。ったく、俺はそんなに変態じゃないぞ。

「いいかリー――」

「い、言い訳なんか聞かないもん！　えっちえっち変態！　フィー兄ちゃんのバカアホ間抜けっ！」

可愛らしくぷくぅと頬を膨らませながら、リールが悪口の限りを

吐き出してきた。
くっ……反抗期か！　だがしかし、俺にそんな罵倒は効かない。怒ったリールすらも愛しく感じるんだからな。
俺はますます顔をほころばせた。
「わ、私のスカートの中を思い出して笑ってるんだね！　ふぃ、フィー兄ちゃんなんかもう知らないもん！」
俺の笑顔は変態っぽいのだろうか。リールはそうはき捨てて、俺の部屋から出て行った。その後ろ姿も可愛いらしい。
「……見てないんだけどな」
リールの背を見送りながら、俺は苦笑いを浮かべて立ち上がる。
そもそもリールのパンツなんて、俺は洗濯物として干してあるのを散々見てるんだけどな。……やっぱり穿いている物を見られるのは恥ずかしいのだろうか？　……そういえば、水着は見せるものだから恥ずかしくないが、下着はあくまで下着だから恥ずかしいとかなんとか誰かが言ってたような……。
俺があごに手を当てながら考えていると、開けっ放しの部屋の入り口からいい匂いが漂ってきた。
どうやら、すでにスリイナが来ているようだ。――あ、スリイナっていうのは、スリイナ・フォシルニクスって言う俺の幼なじみのことだ。いいとこのお嬢さんで、俺の家のすぐ近くにある大きなお屋敷に住んでるんだ。
スリイナのお屋敷には、俺がまだ人殺しに手を出す前、父さんと母さんが死んだ直後に少しのあいだだけ世話になったことがある。そうなった経緯としては、俺とスリイナが幼なじみだからということも当然あったんだけど、もっと大きな理由として、俺の父さんとスリイナの親父さんが昔からの知り合いだったっていう要因もあったんだ。その頃は俺もリールも暗く沈んでた時でさ、正直な話、あの時スリイナのお屋敷に呼ばれなかったら、俺たち兄妹はあと追い自殺でもしてたかもしれない。だって、父さんと母さんがいきなりこの世からいなくなったんだぞ？　そうなるのも無理はないって思

わないか？

……ま、そんな辛気臭いことはさておく。

とにかくだ、スリイナはいいとこのお嬢さんで、俺の幼なじみで、お嬢さんのくせに料理ができる、なんとも不思議なほんわか少女だ。

で、そんなほんわか少女は今日も朝食を作りに来たらしい。別に頼んでるわけじゃないんだけど、やっぱ父さんと母さんがいないことを気遣ってくれてるらしいんだよ。まあ、俺としては作ってくれてもくれなくても、どっちでもいいんだけどな。……いや、あれだぞ？　作ってくれることに関してはありがたくは思ってるぞ？　当たり前だけど。

それで話はちょっとばかし変わるんだけど……スリイナも当然、俺が人殺しだということは知らない。

つまり、俺は自分が殺し屋だってことを誰にも言ってないってわけね。だからって、理解者がいないから辛いとかってわけではないけどな。どっちかって言えば誰にもバレたくないし。――ってそりゃ当然か。

なんてことを考えたのち、俺は部屋を出た。

これはなんの匂いかな？　階段を下りながら、俺は鼻をくんくんさせる。……分からん。

朝食の材料はスリイナが自宅から持ってくるんだ。だから、家の冷蔵庫の中身を把握していてもどんな朝食が出てくるかは分からない。でもま、それがまた面白いんだけどな。

だって驚くなかれ、こないだは朝からキャビアさんが出てきたんだぞ。どこの高級ホテルだ！　って思わず突っ込んだものだ。

でさ、俺がそう突っ込んだら、スリイナの奴なんて言ったと思う？

『こんなの高級じゃないよ？』

だとさ！

生まれも育ちも違うっていうのはまさにこれだ！　と痛感した出来事だったぜ……っ！

ちょっと苛立ちながらリビングの手前までやってきた俺は、さて

さて今日はどんな食材を持ってきやがったのかなぁっと思いながらリビングを覗いて――

「……は？」

俺はリビングに入ることをやめ、廊下で深呼吸を開始する。

あいつ……またやってくれたよ……。とんでもないもん持ってきやがったよ。写真とかでしか見たことのないもん持ってきやがったよぉ！

いやいやちょい待て……あんなもん一体どこで作ったんだ？

スリイナはいつも我が家の狭苦しいキッチンで朝食を作るのだが、あれを作れるほどの機能、うちのキッチンにはなかったと思う。

ということはだ、スリイナの奴……あれを自宅から持ってきたってことか？　フォシルニクス邸から一〇〇メートル近く離れた俺の家まで、スリイナはあれを持って歩いてきたってことなのか。バカかあいつは！

それに俺ってば、朝はシンプルにいきたいんだよね。パンでいいんだよ、パンで。なのに、なのに……何あれ？　なんで朝っぱらから油で揚げたもんを食わなきゃいけないんだ。

イライラが増してきた。俺は文句を言うため、リビングに踏み込む。

「おい、スリイナ！」

「あ。フィー、おはよう」

穏やかな目を緩めに緩めて、スリイナが挨拶してきた。……だがな、俺は挨拶どころじゃないんだぜえ！

「おはようじゃねぇ！　なんじゃあこりゃあ！」

俺は例のモノを指差しながら声を荒げ、スリイナを見据える。

俺たち兄妹よりも色素の薄い金髪、それを肩の辺りで切り揃えてウェーブをかけた髪形。雪のように白い顔はおっとりとしていて、見る者に癒しを振りまく。いまの俺は癒えないけどな。身体は平均よりは少し上ぐらいだと思う。まあ、発展途上ってところだ。で、その発展途上の身体の上に高等部の制服を身に着けている。

そんなスリイナは俺の声にビクッとしながら、
「……何って、北京ダックだよ？」
例のモノの正体を口にした。
そう、そうなんだ！　こいつは北京ダックなるものを持ってきやがったのだ。おかしいだろ？　朝食に北京ダックっておかしいだろ？　本場中国の人でも食わないと思う！
「……何って、北京ダックだよ？」
俺が内なる世界で突っ込みを繰り出しているあいだだろうと、現実世界では時が流れ続ける。
スリイナは、俺のそんな心中突っ込みを沈黙として受け取ったらしい（まあ当然だけど）。大事なことなので二度言いました風にもう一度北京さんを紹介してきた。
「あのな、そんなのは見れば分かるわ。俺がなんじゃあこりゃあ！　って言った理由は、なぜにこれを朝食としてチョイスしたのかってことだよ」
そこはぜひともお答え願いたい。北京ダックはどういう経緯で朝食にセレクトされたのか。個人的にとても気になる。
俺に尋ねられたスリイナは、若干申し訳なさげに言葉を紡ぎだす。
「あのね、昨日の余りなの……。ごめんなさい」
「な……っ！　あ、余りだとぉ……」
俺はそれ以上言葉を続けられない。
なんだって？　ペ、北京ダックが余るってなんだ？　どういうことだ？　一体どんな食卓だったんだよ、昨日のフォシルニクス家。……まあ、でも、余りなら仕方ないかもな。捨てるのはもったいないし。
貧乏気質な俺は、余りという言葉に弱い。もったいない精神が底から湧き上がってきた。
「スリイナ、謝るな。別にいいって。こんなもの食えるっていうのは逆にありがたい。高級なことに変わりはないんだからな。余りで結構コケコッコーってな」

そう、俺は最初ギャーギャーとわめいていたが、これは立派な高級料理。何を文句言う必要があるってんだって話だ。
「そう？　ならよかったぁ……」
ライ麦畑のように穏やかな笑顔を浮かべるスリイナ。――さてと、スリイナの顔に笑顔が戻ったことだし、さっそくいただきますをしよう――と思ってやめる。
リールが食卓にいないじゃないか！　どこに行ったんだ……ってそういえばさっき、リールの部屋のドアが閉まってたような気が……。ってことはもしかして……まだ俺にパンツを見られたって誤解してるのか？　それで恥ずかしくて部屋に閉じこもってるってことなのか……？
うん、まあ、多分そうだろうな。リールは大雑把に見えるけど、以外に繊細な子なんだ。……ったく、ホントにしょうがない奴だな。けど、そういうとこが可愛いんだよな。
「じゃあ俺、ちょっくらリールのこと呼んでくるからな」
「うん、分かった。でも冷めちゃうと美味しくなくなるからね」
あー……確かに、冷えた鶏肉っていうのはあんまり美味くなさそうだな。
「よし、分かった。即行で戻ってくる」
俺は返事を返してリールの部屋へ向かう。
はてさて、どうやってリールを部屋の外に出そうか？　怒鳴って引きずり出すのは論外だし……じゃあ謝るか？
……んー、パンツを見ていないのに謝らなければならないってことに対して少し不満を覚えないでもないけど……でも、リールの顔をこのまま見られないのっていうは、もっと問題だな。
「うん、謝ろう。そうすれば全てスムーズに済むはずだ」
方針を固めた俺は、目の前に迫ったリールの部屋のドアを見て、一度だけ深呼吸。
それから、俺はリールの部屋のドアを二回ノックした。
「おーい、リール。出てきてくれないか？　俺が悪かったよ。ごめ

んな。兄ちゃんに顔を見せてくれないか？　ちゃんと謝りたいんだ」
どこまでも優しいトーンで呼びかけると、
「……ほんと？」
ドアの向こうから、どんな楽器よりも素晴らしい音色が聞こえてきた。ああ、ウィーン少年合唱団よりも綺麗な声だ。俺は聞き惚れながら言葉を返す。
「……ホントだとも。大体、なんで俺がリールのパンツを見てニヤけなきゃいけないんだ？リールのパンツなんて洗濯物で見放題だぞ？　とっくの昔に耐性ついてるから、俺はいまさらニヤけたりしないぞ？」
「フィー兄ちゃんなんか死んじゃえばいいのに！」
「え？　いまなんて」
なんかリールの口から汚い言葉が出たような……。
「だーかーら！　フィー兄ちゃんなんか死・ん・じゃ・え・ば・い・い・の・に！」
「ぐぅぁ……し、し死んじゃえばいいのに、だと……？」
な、なんでリールは怒ってるんだ？　お、俺は何か間違ったことを言ったのか？
「り、リール？　俺はほんとにニヤけてないんだぞ？　というより実を言えば、さっき兄ちゃんはリールのパンツを見てないんだ。ホントなんだ信じてくれ！」
「そ、そういうことじゃないもん！　私の洗濯物のパンツ、その、見てるって……も、もうホントに知らないもん！　フィー兄ちゃんの色情狂！」
し、色情狂……。俺、いまリールに色情狂って言われた？　け、けどなんか、あんまりダメージを感じなかったぞ。……うん、リールにそういう扱いを受けるのも結構いいかも。あは、あはははは――って、いやいやいやいやいやちっが――――う！　早くリールの顔を見たいんだろ！　俺はいま、何に目覚めようとしていた？　あ、危なかった……。危うくダークサイドに堕ちるところだったぜ。

……いや……まあ……もう堕ちてるんだけどな。
でも、いまはそれをさておくことにして、そろそろ本気で謝らないとこれはマズイな。
俺はリールの部屋のドアに向かって誠意を込めて頭を下げる。
「リール。本当に悪かった。女の子なんだからパンツ見られるのはイヤに決まってるもんな。なのに、俺はなんにも分かってやれなくて、むしろ傷つけることばかり言っちゃって……まあ、その、とにかく謝るよ。ごめんな、ホントにごめんな。俺が全部悪かった！」
かなり真剣な調子で、俺は謝罪を述べた。
と、目の前のドアがギィ……と音を立ててほんの少しだけ開いた。俺は腰を直角に曲げる形となっているので、リールがどんな顔をしているのかは分からない。けど――
「フィー兄ちゃん」
さっきまでの怒った口調じゃなかった。いつもの無垢で可愛いリールの声だった。俺はホッと一息ついてから、「なんだ？」と頭を下げたまま尋ね返した。
「あのね……」
言いながら、リールは部屋のドアを最大まで開く。
依然として俺は床を見たままだが、リールの足が俺に近づいてくるのが見える。……何されるんだろ？　もしかして頭なでなで？
いやいや、なんでそんなことされるんだよ！
こんな状況にも拘わらず、セルフノリ突っ込みをしている俺。
対しリールは、そんな俺を戒めるかのように勢いよく部屋から飛び出してきて――
「えいっ！」
なんとも可愛らしいかけ声とともに俺の両肩を押してきた。
押された俺は、唐突過ぎたために身構えることもできず、そのまま後ろにひっくり返ってしまう。まるで、凄腕の武術の使い手にわけも分からず倒されたかのような感覚に陥ってしまった。
「えへへっ、早く朝ご飯食べよ？」

リールは、それで許したからねと言わんばかりのしてやったり顔で俺を見下ろしてくる。
……やっぱり、リールはそういう笑顔が一番だ――って、あぁっ！
「ん？　フィー兄ちゃんどうしたの？」
「い、いや！　なんでも！　それよりもあれだよあれ！　今日の朝食は冷めないうちに食べた方が美味いってスリイナが言ってたぞ？
だからほら、リールは早く行きなさい」
「……変なフィー兄ちゃん。でもいいや！　朝ご飯！　朝ご飯！」
いつもの元気な声を発しながら、リールはスタスタと階段を下りていった。
「ったく、リールは最後の最後で甘いなぁ……」
俺はこらえていた苦笑を表に出した。
だってリールの奴、最後の最後、仰向け状態の俺の眼前に立ったんだぜ？　どうなったかは察しがつくだろ？
そう、今度こそ俺は、おもいっきりリールのパンツを見てしまったわけだ。
ちなみに白でした。
というより白しか持ってません！
毎日洗濯機回して、毎日洗濯物干してる俺が言うんだから間違いない！

1章―2

リールのパンツを目撃してから二分後、俺は食卓にいた。無論、朝食のためだ。

食卓は一度に四人までが使用可能な、まあ、つまりは至って普通の四角いテーブルだ。席は俺とリールが並んで座ってて、スリイナは俺の対面。

この通り、俺たちはもう完全に席へと着いている。けど、まだ北京ダックさんを口にしてはいない。

スリイナによる、北京ダックさんの正しい食い方講座が開かれているからだ。

なんでも、北京ダックさんは皮だけを食べるらしい。そいだ皮とネギとタレを薄い生地みたいな奴にくるんで食べるんだとさ。オサレだことオサレだこと。庶民には無縁の食べ方だな。

「説明はこんなところかな。さあ、もう食べてみていいよ」

北京ダックさん講座が終わったようなので、俺はさっそくいただいてみることに。

えーと、この薄皮の生地に……ダックさんの皮と千切りされたネギ、それとタレを乗っけて……あーん。

俺は完成系を口の中へ運んでみた。

「……あ、美味い」

フィーニット・ストルス、一五歳。食の階段を一段上る。うむ、北京ダックさんとはこれからも末永くおつき合いしていきたい！

そう思えるほどに、北京ダックさんは美味かった。

リールも「おいしい！」と言っている。

俺たち兄妹の反応に、スリイナは胸を撫で下ろしていた。

そのあとも俺は三つ、北京ダックさんを口にした。そうして朝食が終了したわけだが、俺は食卓の中央に君臨する裸のダックさんを見つめていた。

「フィー、どうしたの？」
ダックさんを見据える俺に対して、スリイナが小首を傾げながら尋ねてきた。
「いやさ、この身包みをはがされたダックさんはどうなるのかなぁって思ってな」
ダックさんには、まだ美味そうなお肉部分が残りに残っている。
「うーん、まあ……食べられるけど、普通は、もう食べない……かな。何かに加工しないと味ないしね。これは捨てようと思うんだけど……ダメかな？」
「え？　もったいなっ！　味なくったってタレにつければいいじゃんか！」
あまりにも悲惨過ぎるダックさんの末路に、俺のもったいない精神が騒ぎ出した。
「じゃあいま食べる？」
「あ、いや、それは……」
俺のもったいない精神はどこへやら。正直、もうダックさんいらない。俺って、朝はそんなに腹が減んない方だからな。これが夜なら喜んで食ったかもしれないけど。
でもだからといって、これを夜食うのかと聞かれると、それもちょっとあれだな……。
だってさ、この状態のまま保存してたら……なんとなくだけど、悪くなりそうじゃないか？　冷蔵庫に入れてたとしても、ダックさんは身がむき出しだからさ。なんとなく食べる気が起きないっていうか……ね？　分かるでしょ？
だから、ダックさんの末路は……
「……スリイナに託す」
「分かった。じゃあ私、一回家に戻るね」
スリイナはダックさんの皿を両手で持って、リビングを出て行った。
さよなら、ダックさん……っ！

ダックさんに哀悼の意を捧げ、それから俺は自分の部屋へ向かった。制服に着替えるためだ。
俺はマジシャンもびっくりするほどの速さで着替えをした。――嘘だけど。本当は二、三分かけてゆっくりと着替えました。
そのあとは勉強道具をカバンに詰めて、あーあ学校ヤダめんどいって思いながら再びリビングへ。
どうやら、まだスリイナは来ていないようだ。けど、もういつもの登校時間になったので、俺は毎朝の日課をしてから外へ出ることにした。そうすればスリイナもちょうどよく来るんじゃないかと思う。
で、その日課とはなんぞやと言えば、父さんと母さんの遺影に挨拶をすることだ。
「リール！」
父さんと母さんへの挨拶はリールと一緒に行う。もう何ヶ月と続けている、俺たちの日課中の日課。欠かせない朝の行事といったところだ。
リールもこの時間になると呼ばれるってことが分かってるんだろうな。すぐに俺の下へと駆けてきた。
そうして、俺たち兄妹は並んで父さんと母さんに黙祷を捧げる。
俺は軽く目を閉じた。
……父さん、母さん。人殺しなんかしてしまってホントにごめんなさい。でも、リールのためなんだ。リールに何不自由ない生活をさせてやるためなんだ。……って言っても怒るよな……。いや、それはそうだよ。俺は人殺しなんだから。怒られない方がおかしいんだから。でも、でもさ……罪なんかあとでいくらでも償うから……だからいまだけは、いまだけはこのまま……見守ってて欲しい。せめて、リールが大人になるまでは……このままでいさせて欲しい。父さん、母さん……毎回毎回こんなわがまま言ってホントにごめん。でも絶対に、絶対にいつか償うから、だからいまだけは許してくれ……。

いつもと同じことを思ったのち、俺はゆっくりと目を開く。
「……行くか」
「……うん」
静かなやり取りを行ったのち、俺とリールは外に出た。
すると予想通り、ちょうどよくスリイナが俺の家の前に到着したところだった。
俺たち三人は、いつも通りに学校へと出発する。
今日はよく晴れた日だ。雲なんて一つたりともな――あった。ごめんあったわ。一つだけあったわ。なんかダックの形した雲あったわ。
俺は何気なく、その雲に向かって十字を切る。……アーメン。
でもまあ、それでも快晴なことに変わりはない。
実にすがすがしい。
いつもと同じ通学路を歩きながら空を見上げていた俺は、そう思った。
それから、俺は空に向けていた顔を自分の左右へ向けた。
左にはリールがいて、右にはスリイナがいる。
なんで小学生のリールが俺たちと一緒に登校しているのかと言えば、通う学校が同じ敷地内に存在しているからだ。
リールは初等部六年生。俺とスリイナは高等部一年生だ。
まあ、いわゆるエスカレーター式って奴だ。生活が苦しかったっていうのは、ここのせいでもある。学費がバカみたいに高いんだよ。
でも、人を殺すようになってからはだいぶ楽になった。というよりも、殺しに手を出していなかったら、俺たち兄妹はここに通えなくなっていたと思う。
だから俺は、人を殺したことを後悔してはいない。裏世界に手を出して良かったと、まだ慣れないところもあるけど、大方そう思えるようになってきている――っと、またリールの隣でこんな汚いことを考えてしまった。ダメだダメだ。別の話題に別の話題っと。えーと、何かないかな……――あっ！　これでええやん！

「なあ、スリイナ」
「ん、何？」
「前々から気になってたんだけどさ……」
俺は新たな話題として、いままでずーっと気になっていたことをスリイナに尋ねてみることにした。俺は何年ぐらいこのことを気にしていただろうか？　……んー、かれこれ一〇年近くは気にしていたかもしれないな。
で、その質問っていうのは、
「……なんでお前、歩きで通ってんの？」
というものだ。これは当然の疑問って奴だ。だってそうだろ？スリイナはいいとこのお嬢さんなんだ。ごく当たり前のように執事さんやらメイドさんやらがいるようなお屋敷に住んでいる、いいとこのお嬢さんなんだ。娘のためだけの送迎車なんてものがあったとしてもまったくおかしくはないはずだ。スリイナの家には車がない、ってわけでもないんだ。むしろ逆で、スリイナの家のガレージには、ディーラーか！　と叫んで突っ込みを入れたくなるほど数多くの高級車がある。
それなのに、スリイナは車で通学しない。
俺はその理由を、前々から聞きたかった。
てなわけで、俺はスリイナの方に耳を傾けた。
「だ、だってそれは……車に送り迎え頼んじゃったら……」
俺の問いに答えるスリイナは、どこか言いにくそうにモジモジとしている。顔もほのかに赤くなっている気がする。……なんだ？恥ずかしい理由なのか？
「頼んじゃったら、どうなるっていうんだ？」
気になった俺は、促しをかけてみる。
けど、スリイナはうつむくだけで、その続きを言わなかった。
隣でリールも話を聞いていたと思うので、俺はリールの方に顔を向けて「何でだと思う？」と聞いてみたのだが、「なんとなく分かるけど教えな～い！」といたずらっ子のような表情で言われてしま

った。その表情が可愛かったのは言うまでもない。
　ところで、送り迎えを頼んじゃったら、それが一体なんだというのだろう？　そういう言い方をするってことは、こうして毎朝歩いていくことに何かしらのメリットがあるということなのか？　でも、そのメリットをスリイナは恥ずかしくて言えない。
……恥ずかしいメリット？　歩くことで得られるメリットで恥ずかしいもの？　それは一体なんだ？　……んー、全然分からん。
　まずは、歩くことで得られるメリットだけを考えてみるか。それでそこから恥ずかしいメリットを抜き出してみれば、それがビンゴの可能性だってある。
　でもそれじゃあ、歩くことで得られるメリットってなんだ？　すがすがしさ？　健康？　体力作り？　って――あ！　分かった！　あるじゃん！　歩いて得られるメリットで、だけど人に知られるのは少しだけ恥ずかしいこと。あれだよ、あれ。もうお分かりだろ？
　え？　お分かりじゃない？　なーに、簡単なことさ！　それは――
「ダイエット！　そうかそうか！　スリイナはダイエットのために歩いてたんだな！」
　俺は上から目線にものを言い、勝手にダイエットだと決めつけた。
　てか、それしかないだろ！　人に言うのが恥ずかしいメリットって！
「ち、違うよ……私は……」
「何っ！　違うのかよ！　じゃあ一体なんだってんだ！」
「あ、それはね……その……」
　スリイナは以前モジモジ状態。
「なんださっきから……もしかしてトイレか？」
　もしそうだとしたら、そのモジモジを恥ずかしさとして捉えた俺の推理は根底からくつがえされることになるな。
「ち、違うよ！」
　どうやら違うらしい。じゃあ俺の推理は正しいはずだ。何か恥ずかしいことがあるからこそ、スリイナはモジモジしているというわけだ。しかしながら、最有力候補のダイエット選手が即刻退場して

しまったからなぁ……これは迷宮入りかねえ。スリイナはホントのことを話してくれそうにないしな。
それにかく言う俺も、これ以上追求する気がなくなってきたし、もう、この話はいいか。
「……まあ、違うくてもなんでもいいけどさ、スリイナにはダイエットなんかこれっぽっちだっていらないからな？　俺はそのままでいいと思うからさ」
もしかしたら本当にダイエットのためなのかもしれないので、一応フォローを入れてみた。けど、いま言ったことは本心だ。スリイナはいまのままでも十分に可愛い子だからな。
そもそも女子はみんなダイエットダイエット言っているが、俺はモデル体型が嫌いだ。普通でいいよ、普通で。なあ？　みんなもそう思わない？
「このままで……いい？」
スリイナが、俺の言葉を確認するかのように尋ね返してきた。
それに対して、俺は一つ頷いてから返答する。
「ああ、そうともさ。スリイナはスリイナのままでいい。何も変わらないでいいんだ……」
俺は殺人鬼になってしまった。前とは比べ物にならないほどに変わってしまった。それはもう、普通には決して戻れないほど酷く変わってしまった。
だから、周りには何も変わらないで欲しい。俺を受け入れてくれるところだけは、何も変わらないで欲しい。
あくまで俺の、殺人鬼の願望だが、そんなクズの願いでも叶うというのならば、周りだけは何も変えないでもらいたい。
そう考えると、さっきスリイナにした『……なんでお前、歩きで通ってんの？』っていう質問は……いらない質問だったのかもしれないな。
だってさ、俺は何も変わらないで欲しいんだ。それはつまり、一緒に登校するこの風景だって変わらないで欲しいってことなんだか

らな。
　ったく……数分前の俺め、何も考えずに余計な質問しやがって。……ま、撤回すればいいんだよな、うん、さっきの質問は撤回するに限る。
「あの、それでさスリイナ。さっきの質問だけど、あれはなかったことにしてくれ。俺はこのままがいいんだ。スリイナの一緒のこのままがな。だからさ……あの、これからも一緒に……こうやって登校してくれ」
　言いながら、俺はもの凄く恥ずかしい台詞だと気づいた。くそっ、絶対赤くなってるぞこれ……。ああもう、ホントに恨むぞ！　数分前の俺め！
　俺はスリイナから顔を逸らそうとしたが、自分から頼みごとをしておいて顔を逸らすっていうのは凄く失礼なことだろうなと考え、なんとか逸らさず現状維持を続けている。
　そんな恥ずかしそうな俺を見たスリイナは、何やら嬉しそうに微笑んだ。
「うん、いいよ。私だってこのままがいいから……」
　そう返答してくれたスリイナの顔は、心なしかまた赤くなっている気がする。
　……きっと俺の恥ずかしい台詞のせいだ。こういうのって言われた方も恥ずかしいんだろうし……。あとさ、スリイナの台詞もちょっと恥ずかしい感じだったもんな。スリイナはいましがたの俺みたいな感情を味わっているのかもしれない。
　でも俺はさ、そう言われて正直嬉しかった。……けど、その言葉は殺人を犯してた俺にじゃなくて、幼なじみとしての俺に言ってるんだろうけどな。
　したがって本来は、俺にその言葉を受け取る資格なんてないのかもしれない。
　だけど、俺はこの場では……何気ない日常っていう一番大事な時だけは――ずっと前の自分で居るって決めている。殺人なんていう

非人間的な行いをしていない時の自分で居続けるって決めてるんだ。
だから……凄い身勝手かもしれないけど、俺はスリイナの言葉を受け取る権利を行使させてもらう。
そして、俺なんかにはもったいない言葉を受け取ったのだから、俺はスリイナに言わなければならない台詞がある。
「ありがとな……」
「ううん。どういたしまして……」
うおお……照れくさいぃ……。俺は今度こそ我慢できず、スリイナから顔を逸らした。
そうして、明るくもそこはかとなく暗い雰囲気となってしまったところで、
「ふんっ！」
リールが、面白くない！　といった感じの効果音を上げた。
おっと、そういえばリールが仲間外れになっていたじゃないか。これはいけない。
俺は急いでリールの方を向いて、
「リール。リールもずっとこのままでいてくれるか？　特にリールは俺にとってたった一人の家族だからな。もしリールがいなくなったら……その時は兄ちゃん、泣くからな？」
リールの顔を見据えながら俺が真剣に告げると、リールは不機嫌だった表情を一変させて満面の笑みを浮かべた。か、可愛い……。
「フィー兄ちゃんホント！　私がいなくなったらフィー兄ちゃん泣いちゃうの？　そんなに私のこと大事？」
何を言ってるんだこの子は！　そんなことは……そんなことはぁ――
「当然だろ！　当然過ぎるぞ！　当たり前のようにとても大事だ！だからリール、俺の前からいなくならないでくれるか？」
「うん！」
リールはニィと嬉しそうに笑ってくれた。……これは、俺が必要とされている証として受け取ってもいいのだろうか？　どうなんだ

ろう……？　さすがにそう受け取るのは調子に乗り過ぎってもんじゃなかろうか。

まあ、でもいいさ。リールが俺を必要だと思っていようが思ってなかろうが、そんなことはあまり関係ない。なぜなら、俺のするべきことは何も変わらないからだ。

リールに何不自由ない生活を。

これが俺の生きる理由だから。

1章―3

いつもとはだいぶ違った雰囲気での登校となってしまったが、何はともあれ、無事に学校へ到着した。
当たり前だが校舎が違うので、ここでリールとはお別れだ。
「いいか、リール。お前をイジメてくる奴とかがいたら、すぐ俺に言えよ。そいつをこらしめてやるからな。兄ちゃんはいつだってお前の味方だ」
幸い、いまのところリールにそんな兆候は見られない。けど、もしもリールがイジメなんてものに巻き込まれたら……俺は、そのいじめっ子をこらしめるどころじゃ済まさないことだろう。
といった具合に結構物騒なことを考えていると、リールはまぶしい限りの可愛らしい笑顔を振りまいてきた。
「大丈夫だよ！　もう、フィー兄ちゃんは心配性なんだから。イジメなんてものと私は無縁だよ、無縁！　それどころか、私モテモテだもん！」
言い終わると、リールは踊るように校舎へと走っていた。
「も、モテモテだとぉ……？」
そ、それはそれで許すまじだなぁオイ！　ボウズどもめぇ！　リールに変なことしたら俺が八つ裂きにしてやるからなぁ！　……いや……でもまあ、あれか？
「イジメられるよりは……マシ、なのか？」
俺がそう呟いた時には、もうリールの姿は初等部の生徒たちの中に紛れ込んでしまっていて、完全に見えなくなっていた。
俺はそのことに若干の寂しさを覚えた。なんかさ、リールがどっかに行ってしまったみたいだよ……。
しっかしモテモテかぁ……初耳だよぉ……。
俺は今世紀最大のため息と言ってもいいくらいのため息をついた。
「やっぱりお兄ちゃんとしてはつらいの？」

そのため息を見てか、スリイナが様子を窺うように尋ねてきた。
俺はもう一度盛大にため息をついたのち、うめくように言葉を返す。
「……そりゃそうに決まってんだろうが。もうつらいなんてもんじゃないな……。だってあれだぞ？　スリイナに好きな奴がいるかどうか知らないけどさ、もしいるなら、そいつがハーレム状態ってことだぞ？　つらいよりもつらくないか？」
そう告げてみると、スリイナは悲しそうに顔をしかめる。
「……フィーがハーレム状態か……確かに嫌だね、そんなの……」
ん？
「な、なんで俺がハーレムなんだ？　俺は、お前の好きな奴がって言ったんだぞ？」
「あ、その、えと、そ、そうだね。フィーじゃないね。ご、ごめん……」
スリイナは慌てたように前言撤回すると、顔を赤く染めてうつむいた。
……ったく、恥ずかしい間違い方すんなよな。にしてもびっくりしたぁ……。スリイナが俺のこと好きなのかと思ったじゃんか……。
ああ、なんかもう！　俺も照れくさくなってきたぞ！
「さ、先行くからなっ！」
俺は足早にスリイナから離れる。振り返りもせず校舎にまっしぐら！
早くあいつとバカトークをして、この照れくささをなくさなければ！
一人の男を頭に思い浮かべながら、競歩のように歩くこと一分。
俺は教室に到着した。自分の席へと向かい、机の横についているフックにカバンを下げた。
えーと、それであいつは……何っ！　まだ来てないだと！
俺の探し人はまだ来ていないらしい。くそっ……なんでこういう時に限っていないんだよ。来なくてもいいタイミングとかでは出て

くるくせに……。
　ああこれじゃあスリイナが先に来ちゃうじゃんかぁ――なんて思ってるとほら、来ちゃったよ……。
　走って俺を追いかけてきたらしく、スリイナは少し息をあげていた。ホントは席に着いて休みたいだろうに俺のところへ直進してきて、
「フィー、ごめんね。変なこと言っちゃって……」
　だとさ。そう言われた俺は一体どうすりゃいいんだ？　別に俺、怒ってないのに。ただ単に照れくさくて逃げただけなのに。でも、そうやって説明すんのもまた恥ずかしいし。ああ、ホントにどうすりゃいいんだ……。
　と考えてるあいだ、現実から見れば俺は沈黙しているわけだ。
　そしてスリイナは、どうやらその沈黙を無視だと受け取ったらしい。
「あの、ほ、ホントにごめんね……」
　震えた声音で言い残して、スリイナは廊下へ走り去っていった。
　ドラマみたいだ……って客観的に見てる場合じゃないよな、これ。やっぱこれって追いかけるべきなのか？　……べきだよな。
　追いかけようと決意して俺は立ち上がる。足を廊下に向けて、教室の出口から駆け出そうとしたその時――
「おいフィーニット！　スリイナさんが泣いてたぞ？　お前何しやがった！」
　ああもう！　なんちゅうタイミングなんだ！　俺の言ってたことが分かったか？　こいつは――マイケルはこういう奴なんだ。
　もう知らん！　こんな奴の身体描写はしてやらん！　……でも、ちょっとだけかわいそうだから、一つ特徴を言ってやることにする。
　えーと、こいつの特徴は……あー、特徴は……その、うん、エロい。
　身体描写じゃないじゃんって突っ込みは受けつけないぜ。マイケルは君たちの心でそれぞれの形に創造してくれ――ってこんなこと

言ってる場合じゃねぇえええええ！
スリイナだ！　俺はスリイナを追いかけないといけないんだ！
「あ、分かったぞーっ！　お前、我慢できずにスリイナさんに手を――」
「出してないっ！」
俺がバスケット選手並みの追い抜きをかけようとするも、マイケルの素晴らしいディフェンスで廊下に抜けられない。
「じゃあ何したんだよ？　――ま、まさか！　ここでスリイナさんを罵倒して泣かせて、それで快感を得ようとしたのかっ！」
「どんなサディストだ！　そもそも俺はニュートラルだ！」
「なんと！　フィーニット君はニュートラルらしいですよ～っ！
なんて大胆なんでしょう！　よっ！　このニュートラルッ！」
マイケルは教室中に聞こえるようにわざと声を張り上げた。……バカか？
「お前な……ニュートラルって中間って意味だからな？　そんな風に言いふらされても、俺はまったくダメージを受けないからな？」
「何！　じゃあお前マゾか！　こんな羞恥プレイにも耐えるとは……末恐ろしい奴だ！」
「だからニュートラルだって……」
もういいや……疲れた。
何この、廊下に行きたい奴とそれを必死に阻止しようとする変態の図。
それに俺、なんで廊下に行こうとしてたんだっけ？　……ま、いいか。忘れるってことは大したことじゃないんだろう。うん？　いや、大したことだった気が……ど忘れって奴かな？　いきなり考えてたことが消えてなくなったよ。
廊下に行こうとして老化って奴だね。
……ごめん、謝る。
にしても、なんで俺は廊下に行こうとしてたんだろうか？　……いまのは狙ってないよ！

もういいやいいや！　なんで廊下に行こうとしたのか？　そんな理由は考えても出てこないな、うん。
それにあれだ、時計だってもうすぐＨＲって時間を指してるしな。これから教室の外に行ったって何もできやしない。だからスリイナも帰ってくるだろ――ってそう！　スリイナ！　スリイナじゃないか！　俺はスリイナを追いかけようとしてたんじゃないか！　いやぁ、モヤモヤが一気にスーっとなくなったぜ！
お、噂をすればなんとやらだ。スリイナが帰ってきた。まあ、時間には厳しい奴だからな。……さてと、謝罪と弁解をしに行くか。
あいつが廊下に飛び出していったのは、俺の沈黙のせいだったもんな。
俺はスリイナの席へ向かう。
机の真横に俺が立つと、スリイナはハッとした表情を浮かべながら俺の存在に気づいた。けど、顔をすぐに別方向へ逸らした。
……顔を逸らした行為には、どんな意味が込められていたんだろう……？
涙を流した目を見られたくなかったのか。それとも怒ってるのか。――いや、どちらだろうと関係ないな。だって――俺が泣かせたことに変わりはないんだからさ。
「……スリイナ、その、ごめんな」
俺が謝罪を述べると、スリイナは驚いたようにこちらを向いた。スリイナの穏やかな瞳は若干ながら赤みがかっていて、まだうっすらと涙が残っていた。
顔を逸らした理由はどうやら前者――泣き顔を見られたくない、の方だったようだ。
「……謝らないで。私がフィーに変なこと言っちゃったのが悪いんだから」
またスリイナは謝ってくる。いっつもだ。どっちが悪いとかあんまり考えずに、スリイナはいっつも勝手にとにかく謝ってくる。それが悪いとは言わないけど、たまには謝らせろ！

「何言ってんだよ。今のは誰がどう見ても俺が悪い。ちょっと考えごとしてたとはいえ、俺はスリイナの言葉を無視したんだ。そのことに変わりはない。だから俺が悪い。ホントにごめんな」
「だ、だからフィーは謝らなくていいんだってば。私はもう気にしてないからぁ」
俺が頭を下げると、スリイナは焦ったように言葉を発してきた。
どうやらホントに怒ってないらしい。なら、お言葉に甘えて謝罪はここまでにしとくか。
俺が頭を上げると、スリイナは安堵したかのように胸へ手を押し当てていた。
「そこまでのことかよ……」
「そこまでのことだよ。悪くない人に謝られても困るだけだもん」
「だから悪いのは俺だっ……」
そこまで言いかけて、俺は折れることにした。このままだと水かけ論になりそうだからな。
「この話はここまで。埒が明かないったらありゃしない。もう悪いのはどっちもってことでいいか？」
「まあ……それならいいよ。でも、ホントは全部私が悪いんだからね？」
「へいへい……もう勝手にそう思ってればいいさ」
俺が呆れて呟くと、スリイナは「やったー」ともうわけの分からない反応を示していた。
けど、俺も俺で満足している。スリイナの笑顔を――癒しをくれる優しい微笑みを見ることができたんだからな。スリイナもリールと同じで、にこやかな方が似合ってるし……その方が可愛い。ま、口が裂けても言えないことだけど。
「じゃ、俺は席に戻るから」
「うん」
そう告げて、俺は自分の席に戻る。その途中、マイケルが下卑た笑みを浮かべながら話しかけてくる。

「どうだった？　怒ってたか？　フィーなんて死んじゃえって言われたか？」
「言われてない。マイケル、お前の目は節穴か？　見ろよスリイナの顔を。あの顔で死んじゃえ、とか言うわけないだろ？」
ここからだと横顔しか見えないが、スリイナは確実に機嫌よさげだ。もの凄くニコニコしている。
「そうかそうか。それは変なことを聞いちまったな。……いや、ただな、あの顔でフィーなんて死んじゃえって言うプレイでもしてたんじゃないかと思ってよぉ」
「どんなプレイだ！　あんなニコニコした顔で死んじゃえって言う奴があるか！　もしそうだとしたら、スリイナ生粋のサディスト過ぎるだろっ！」
あははっ！　フィーなんか死んじゃえ！
と言うスリイナを想像してみた。
……怖っ！
「でもよぉ……あの顔でSだったら、それはそれでアリだよなぁ……」
えへへへへ、と笑い始めるマイケル。……気色悪い奴。
一刻も早く関わりを絶とうと考えて、俺はマイケルの席から秒速一メートルの速度で離れていく。
そうして俺が自分の席に着いたところで、担任の先生がやってきた。
あーあ、また退屈な時間が始まるのか……。

1章―4

「死ぬぅうう……」
唸らせてくれ。今日の午前の授業は内容が濃すぎたんだ。どのくらい濃かったかと言うと、薄めないカルピスの原液ぐらい。これで理解してもらえると嬉しい限りだ。
「うぅ……ぁあぁ」
俺は机に突っ伏して唸り続ける。
と、そんな俺の隣に突如ふわっとした雰囲気を持つ何者かがやってきた。俺の知り合いにこんなオーラを発する者は一人しかいない。
「フィー、お弁当食べよ？」
もう例のごとくスリイナである。俺は机とコンニチハしながら、
「今日はなんですかぁ？」
弁当の中身を聞く。俺の（リールのも）昼飯はスリイナが作ってくれているからな。
「今日はね、サンドイッチだよ」
……サンドイッチ選手、中四日のローテで回ってるなぁ。サンドイッチはスリイナのレパートリーの中でエース格のようだ。
あ、これは別にサンドイッチに飽きたとかじゃないぞ？　美味いからいいんだ。
「どれどれ、サンドイッチの献上を許可する」
「え～っ！　ここで食べるの！　……屋上に行かない？」
来た来た……天気がいいとすぐどっか別のところで食いたがる。
「別にここでいいだろ？　机があるんだからさぁ」
「そうそう。机があった方がスリイナさんを食いやすいよな。それに最高の羞恥プレイだ！　なぁ、フィーニット」
唐突に現れた変態の言葉。
「……マイケル、お前なあ……」
乱入してきた上に、その乱入方法がお下劣トークと来たもんだ。

俺は心底呆れる。
未だ机とコンニチハしたままの俺には見えないけど、きっとスリイナは顔を真っ赤にしていることだろう。お嬢様だからか知らないけど、スリイナはその手の話にまったく免疫がないんだよ。
「おいマイケル、お昼以降はお前と関わりたくないって、なんど言ったら分かるんだ？」
マイケルは昼から徐々にギアが切り替わっていくんだ。夜は大人もドン引きするほどの話をするともっぱらの噂だ。
「そんなひどいこと言うなよ～。俺たち友達だろ？」
「朝だけな」
「あ、朝、だけ……？」
「ああそうとも。朝だけだ」
ホントなら朝だってつき合いたくない、というのはさすがにかわいそうなので言わないでおく。
それよりも、いまはこのエロ魔人から早いとこ離れたいので、俺は机とサヨナラすることを決意。スリイナの言うとおりにしようと思う。
「よしスリイナ。屋上に行こう」
やっぱり顔を紅潮させていたスリイナの手を取り、俺は屋上へ向かう。
「お、屋上で食うつもりだな！」
「当たり前だろ！　お前のいるところでメシなんか食えるかっ！」
俺たちは手をつないだまま走り、そうして屋上にやってきた。おお、風が気持ちいい。
授業という呪術によってかけられた呪いが、新鮮な空気によって浄化されていくような感じた。日光が少々まぶしいが、それもまた心地よい。
まあ確かに、弁当を食うにはちょうどいいかもしれないな。
何より、誰もいないというのがいい。きょうび、屋上でランチ、なんて奴らはいないのさ。普通に教室とか食堂で食ってるよ。

「あ、あ、あの……フィー？」
依然として赤い顔したスリイナが、恥ずかしそうにおどおどした口調で、俺に声をかけてきた。
……ああ。
俺はその問いかけだけで、スリイナが何を言いたかったのかをなんとなく察することができた。
「悪い悪い、手、握りっぱなしだったな」
俺はスリイナの手を放す。いくら幼なじみでも、やっぱ手を握るなんてことされたら恥ずかしいよな。いまそうやって意識したら、俺もちょっと恥ずかしくなってきたもん。
なんて考えていたのもつかの間。
どうやら手を握っていたことはあまり関係なかったらしく、スリイナはまだおどおどとしている。
「なあ、どうしたんだ？」
具合でも悪くなったのかと思い心配して尋ねると、スリイナは真っ赤な顔をよりいっそう赤くさせて、
「た、食べるの？」
そう聞いてきた。え？　なんでそんな質問で顔を赤くする必要があるんだ？　昼飯食べるに決まってんじゃん。エロ野郎の前で昼飯なんか食えないからここまで来たってのに。
「スリイナ、食べるに決まってんだろ。さあ、早くしろ。ここまで来ておいてお預けはナシだぞ」
早く昼飯を渡せ。その手に持っているものを渡すんだ。
「ほ、ほんとに食べるの？」
なんだ？　失敗でもしたのか？　でもさっきは自信満々にサンドイッチだって言ってたよなぁ。そもそもサンドイッチを失敗ってなんだよ。どこぞの二次元のヒロインかって話だ。
「しつこいぞ。食うったら食う。だから早くしろ。お前から差し出さないって言うのなら、俺は力づくで奪うぞ」
サンドイッチをな！

「わ、分かったから、力づくはやめてね……」
どうやらやっと分かってくれたようだ。スリイナは右手に持ったサンドイッチの入った弁当箱を地面に置いた。
やっと昼飯だ。俺は地面に座る。しかし、なぜかスリイナが座らない。
「ん？　どうした――って何してんだぁあぁぁあっ！」
スリイナはなぜか制服を脱ぎ始めていた。まだ九月上旬で制服が夏使用なので、もうカッターシャツがはだけて、せ、成長途中であろう谷間がぁ……じゃないや！
俺は慌てて目を逸らし、
「な、なんで服脱ぐんだよっ！」
「だ、だって、フィーが私を食べるって……」
「そっちじゃねぇえええええええええええええええええええええっ！」
なんかおかしいと思ってたら、なんちゅう勘違いを！
「俺が食うのは昼飯だっての！　スリイナじゃねぇよ！　それより早く着直せ！」
「ご、ごめん……」
「いやまぁ……いいけどさ」
谷間を拝めましたから。
にしても……ったく、それもこれも全部マイケルのせいだ。あいつは学校に来ていい奴じゃないんだよ。
学校側、マイケルに永久謹慎の通達でも出してくれないかなぁ……。いや、それよりも俺に殺しの依頼さえ出してくれれば……マイケルがいたという事実すら残さず消してやるってのに……。
でもま、それをやるにしたって（ま、やんないけどさ）まずは昼飯が先だ。俺は弁当の方、もといスリイナの方を向く。
スリイナの顔は、まだ茹でダコのように火照っていた。
「さ、メシメシ」
俺はあえて何もなかったかのようにふるまう。

スリイナはそんな俺に合わせるかのように、「う、うん」とちょっとぎこちなく頷いた。
そうしてやっとこさたどり着いた、スリイナ手製のサンドイッチ。
ハムとレタスだけを挟んだシンプルなものから、茹でタマゴをほぐした感じの奴を挟んでいるちょっと手の込んだものまで、色々な種類のサンドイッチが目の前に存在している。
俺はシンプルなハムレタスからいただくことにした。「いただきまーす」と常套句を発したのち、俺はハムレタスにかぶりつく。
あ、やっぱ美味いな……。
しみじみとそう思う中で、俺はある別のことも考えていた。
なぜスリイナは俺の前で服を脱いだのかってことだ。さっき俺は勘違いってことで納得したけど、やっぱおかしいよな。
だってスリイナは、その……お、俺に食われてもいいと思ったらしいんだぞ？　ど、どういうことなんだ？　朝、リールと別れた直後のスリイナの反応だと……スリイナは俺のことを好きじゃないはずなんだ。
なのに……なんで好きでもない奴の目の前で服を脱いだ？
しばらく思考を働かせていると、俺の中に、ある一つの単語が浮かび上がってきた。しかもそれは、いまさっきのスリイナを表現するのに最適な言葉だった。――てゆーかこれだ！　これしかないよ！
あまりにもジャストフィットするその言葉。心地いい感覚に襲われて心中で連呼しまくっていると――俺は思わず口を滑らせて、その単語を現実世界に音として繰り出してしまった。
「痴女！」
「ひゃう！」
可愛い擬音を発してスリイナが反応した。それからみるみる落ち込んでいくのが分かる。まるでアサガオが枯れていくさまを早回しで見ているようだ。――ってそんなこと言ってる場合じゃないぞ。
ふぉ、フォローしないと……。
「お、オープンなのは……悪いことじゃないと思うぞ？　俺は」

「ひゃうぅ……」
どうやらフォローを間違ったらしい。
スリイナは完全に枯れ果ててしまった。

1章―5

我らは若者。
枯れ果てようが朽ち果てようが、時間さえ経てば全てを忘れることができる。学生はやることが多いのだ。
そして、それはスリイナも例外ではなかったようだ。放課後のいま現在、スリイナは昼のことなどすっかり忘れているようだった。
――立ち直ってくれて何よりだ。
帰り支度をしながらスリイナを見ていて、俺はそう思った。
さて、話は変わるんだが、放課後というのは一日の中で一番ハッピーなことが起こる時間帯なのだが、それを皆さんはご存知だろうか？　ご存知ない場合、それは人生の九割を無駄にしていること請け合いだ。
そのイベントが起こるのはもう少し先。それまで俺は、初めて球場でメジャーの試合を見た少年のようなわくわく感を抱いていようと思う。
帰り支度の済んだ俺は、スリイナのところへ向かう。
「さ、帰ろうぜ！」
「フィー、嬉しそうだね」
スリイナは少しバカにしたような笑みを浮かべて俺を見てくる。
でもいいんだ。だって実際、スリイナの言うとおり俺は嬉しいんだからな。隠す必要なんてない。やっと拷問から開放されるような気分と言えば分かるだろうか。ま、拷問とか受けたことないんだけどな。いや、受けた受けてないなんてこの際関係ない。いまの例え方は間違ってないだろうからな。これほど俺の気持ちを反映した言葉もないと思う。いや、もう現実が拷問そのものだといっても過言ではない。
俺とスリイナは校舎を出る。そうして、学校の校門付近で立ち止まる。

ここまで来ればもう言わなくたって分かるだろ？
一日で一番楽しいイベント。
拷問からの開放。
それらが意味することは、一人の少女との再会だ。
待つこと五分。俺にとってこの五分は、今日過ごした時間よりも長く感じられた。
「ああ、可愛い……」
俺は思わず呟く。でも本当なんだから仕方がない。
初等部の校舎から出てくるどの子よりも可愛い。ああ、輝いている。あんな子が妹でホントによかった――と、ここまで言えばどんな奴でも、例えサルでも分かるだろう。
そう、俺が待っていたのはもちろん――リールだ。
と、リールが俺の存在に気づいたらしくブンブンと手を振ってくる。ああ、幸せだ。たったこれだけで今日の疲労が全て吹っ飛ぶ。
リールがこちらに近づいてくるにつれて、俺の口元は緩んでいく。
「フィー兄ちゃん！」
俺の下に駆け寄ってきたリール。そんなリールに、俺はちょっと早いかもしれないが、この言葉をかけた。
「リール、おかえり」
「ただいまっ！」
口をニィと横に開き、白い歯を見せてくる。
返事を返してもらうだけで俺は……俺は感動した！　これを言ってもらうためだけに学校に通ってると言ってもいい！
俺は身を悶えさせる。周りから『あ、またあの人だ……』みたいな視線で捉えられている気がするけど、そんなの知ったことかっ！
可愛いものを見て悶えることの何が悪いってん……リールも引いていらっしゃる？
ふと目に入ったリールの顔は、引きつった笑みを携えていた。
……言うまでもなく、俺は悶えることをやめた。気を引き締めるために咳払いを一つ。

「うおっほんっ。さ、帰ろうぜ……」
俺は勇気を振り絞ってリールに手を差し出してみた。
すると、リールは嫌がる素振りを一つも見せずに俺の手を握り返してくれた。……おお、なんて優しいんだろう……っ！
リールの手は小さいが、生きていると感じさせる力強さがあり、しかしながら繊細さも兼ね備えている温かな手だ。
その温もりを感じ取りながら、俺は歩き出す。
「スリイナ姉ちゃんのサンドイッチ美味しかったよ！」
登校の時とまるっきり同じ道を通りながら帰る道中。リールの明るい声が話題を生み出した。
「ホントホント。いくらサンドイッチは作るのが簡単だっていってもさ、あの味を出せるスリイナの腕は本物だよな」
俺はリールの意見に乗っかる。
それを聞いたスリイナは嬉しそうな、けど自分を嘲るような笑みを浮かべながら、
「そう言ってもらえるのは嬉しいけど……でも、美味しいのはいい食材を使ってるからだと思うよ。同じ材料で作れば、フィーにもリールちゃんにだって作れると思うなぁ」
「いや、それは絶対に違うぞスリイナ」
「そうだよ。違うんだよスリイナ姉ちゃん」
兄妹揃っての反論に、スリイナは首を傾げていた。……まあ、兄妹揃ってと言っても、たぶんリールは俺の言葉をマネしただけなんだろうけどな。
なので、当然俺が続きを連ねていく。
「スリイナ、よく考えてみろ。一流の料理人だって食材は一流のものを使うだろ？　それと同じだ。いい食材使って美味いもんが作れるんなら、それはスリイナの腕がいいってことだろ」
「んー、そうなのかな？」
スリイナはどこか否定的に視線をさまよわせていた。
素直に喜べばいいんだよ、ったく。……もう一押しってところだ

な。
「そうなんだよ。そもそも、いい食材を使ったら必ず料理が美味くなる、なんて保障はどこにもないだろ？　下手な奴は高級食材だろうとダメにするだろうしな。だから、スリイナは料理が上手だってことなんだよ」
俺がそう告げると、スリイナは気恥ずかしそうに笑った。
「そうだね。フィーがそう言うのなら、そうなんだろうね。でも私、それで満足はしない。もっともっと食材を上手に扱えるようになる。なんて言うのかな……食材の味を引き出すみたいな……ね？」
「おう、頑張ってくれ。お前なら引き出せるさ」
腕を上げてもらえるのは悪いことではないからな。
しかしまあ、このあとも出てくる話題は食い物ばかり。この年代なら恋愛の話なんかがあってもいいような気がするんだけどな。
まさに色気より食い気ってか。
ま、いいんだけどな。この二人の恋愛話とか聞きたくないし。特にリールのは絶対に聞きたくないぞ！　……っと、つい熱くなってしまった。
でも、妹の恋愛に口を出したくなるのはどこの兄貴もそうだろ？
……あまり賛同を得られそうにないな。だが、それは俺も分かった上での所業だ。自分が気持ち悪いってことぐらいは分かってる。
けど、分かっていても、それでも守りたくなるんだ。リールにはそれほどの……。
俺はスリイナと食い物の話をしているリールを一瞥する。
……それほどの魅力があるんだからな。
はは……これがキモいってことなんだろうな。
なんて考えていると早いもので、もう我が家に到着した。
「じゃあスリイナ、また明日な」
「バイバイ！　スリイナ姉ちゃん！」
「うん。また明日ね」
スリイナは楚々と手を振り、俺たちの前から離れていく。

もう毎度のことなので、見えなくなるまで手を振り続けるなんてことはしない。ある程度離れたところでお互い切り上げる。
スリイナがこちらに背を向けたところで、俺たちは家に入った。
「ただいま」
「ただいま〜っ」
俺とリールは同時に声を発した。中から父さんや母さんの返事が返ってくるわけじゃないけど、挨拶はきちんとしなさいという家訓の下に育ってきたから、まあ、癖みたいなもんかな。
俺とリールはそれぞれ自分の部屋へ向かう。家に帰って最初にすることは着替えだ。脱いだ制服はきちんとハンガーにかけてしわにならないようにする。……こうしないと母さん、うるさかったなぁ……。
普通に生活していると、そんな風に父さんや母さんの言動を思い出すことがある。親っていうのは、それだけ子供の生活に欠かすことのできない存在ってことなんだろうな。別にいなくなってから分かったってわけじゃないけど、いなくなられてしまって身に沁みたっていうのかな……親の影響は大きいんだなって改めて認識した感じだ。
そして再認識した感想だけど、やっぱり親は居た方がいい。俺たち子供の面倒を見てくれるありがたい存在だし、それに何より、俺にしてみれば……父さんと母さんさえ生きていてくれれば……殺しなんかに手を出す必要もなかったっていうのにな。
けど、ここで父さんと母さんにそういう思いを抱くのはお門違いも甚だしい。殺しはあくまでも俺自身が決めた道だ。むしろ父さんと母さんは、俺がそんなことをしようとしていると知ったら、間違いなく止めてくれるだろう。無論、それは生きていればの話で、現実はそうじゃない。生きていないからこそ、俺は裏の世界に堕ちたわけだ。絶望がうごめく世界にな。でも、俺の世界は裏だけじゃない——輝かしい表もある。
表には父さんと母さんの残した形見がたくさんあって、その中で

も一番大きな形見は、自宅兼何でも屋である我が家だ。近所の人たちの役に立ちたいという志の下に始めた『ストルス雑務店』。
俺はその志を――父さんと母さんの思いを受け継いで、今日も『ストルス雑務店』を開業しようと思う。ホントは受け継ぐ資格なんてないんだろうけど……。
というより、正直な話、無理に受け継ぐ必要はないんだ。だって、殺しの報酬だけでも普通に生きていくことはできるからな。
……するとここで疑問が湧いてくるよな？

なんで俺は『ストルス雑務店』を受け継いでるのか。

なんでか分かるか？　結構ちゃんとした理由があるんだぞ。
はい、シンキングタイム終了ーっ！　――ってシンキングタイムなかったじゃん！　まあ別にいいよな？　答えを教えてやるんだからさ。
で、その答えっていうのは、要するに隠れみのだ。
殺し屋で十分に儲かってるけど、かといって何もしないと怪しまれるかもしれないだろ？　俺が殺し屋をしていることは当たり前だけど誰も知らない。けど、父さんと母さんがいないことは知られている。それゆえに、『ストルスさんとこの坊主は何もしないでどうやって生活費をまかなってるんだ？』ってご近所さんに怪しまれるかもしれないだろ？
だからこそ、俺は『ストルス雑務店』を営業するんだ。もちろん父さんと母さんに対する思いがないわけじゃないぞ？　さっきも言ったけど、志はきちんと受け継いでいるつもりだ。半端な仕事はしちゃいない。
それを証拠にっていうか、最近はご近所さんからの依頼がだいぶ増えてきているんだ。俺の健気さがご近所さんに伝わってきたんだろうな。
でもあれだ、だからって殺しはやめない。依頼が増えてきたとい

っても、まだそこまで稼げてるわけじゃないからな。せいぜい、ジャパニーズお父さんの毎月の小遣いぐらいだ。
「さーて、今日も頑張りますか……」
動きやすいようジャージに着替えた俺は、一階の仕事場へ向かう。
仕事場には色々な道具が置いてあって、まるでホームセンターの一角のような場所だ。
「どれどれ、今日の依頼は……って今日はナシかよ」
留守中の依頼を承るために用意している、くじ引きに使うようなボックスを覗いて、俺は呟いた。……ま、こんな日もあるさね。
俺は売店風のカウンターに肘をつきながら、ぼけーっと依頼を待つことにした。
しかし、我が家の前を通る人々は、全員がただの通行人でしかない。
ああ、退屈だ……なんて思っていると――
「フィー兄ちゃん！」
まるで計ったかのようなタイミングでリールがやってきた。す、素晴らしい！　さすがリール、ナイスだ！
「フィー兄ちゃん、今日は依頼ないの？」
「そうなんだよ。だからとてつもなく暇だ。リール、なんかないか？」
「なんかって何？　遊び？」
「そう、遊びだ。……ここから離れるわけにはいかないから、ここでできる簡単な暇つぶしみたいな奴とか、かな」
そう言う俺は実のところ、リールがいればそれでいい。見てろっていうなら何時間でも見ていられる。見てるだけでも十分に暇が潰せるってもんだ。
けど、それじゃあリールがかわいそうだ。ただ黙って見られてるだけなんて、天真爛漫のリールにはできないし、そもそもそんなのはリールじゃない。
「うーんとねぇ……じゃあ、ハンプティ・ダンプティの早書き競争

なんてどうかな？」
「何それ！　初等部で流行ってんのか！」
「そうだよ！　私一番なんだよ！」
ほほう、さすがだ。そんなマニアックそうなゲームで一位を取れるとは……。
――いや、でも待てよ……？
「それって絵のクオリティはどうなんだ？　丸に手足つけただけ、みたいなのか？」
もしそうなら、運次第で誰でも一位なれそうだけど……。
「ううん。私はほんのちょっとだけ凝ってるよ。先生、私の絵を見て褒めてくれたもん。『うわ……っ！』って！」
引いてる？　引いてるよな？　先生明らかに引いてるよなっ！
ってことはリール……早書きなのに凄い次元の絵を描いてるってこと？
……見たい。
「よし！　それでいいぜ！　兄ちゃんと勝負だ！」
「負けないよ～っ！」
というわけで、第一回・ハンプティ・ダンプティ早書き王座決定戦が始まった。
カウンターに置いてあった紙とペンをリールに渡す。俺も同じものを用意し、さあ始めましょうとしたところで――
「じゃあ公式ルールの説明ね」
だとさ。俺は鼓膜が正常に機能してないんじゃないかと、我が耳を疑ったね。
だって、公式ルールって何？　早く書くだけの遊びになんのルールがいるっていうんだ？　そもそも公式って……どこが認可したんだ？
さすがに突っ込もうかと思ったが――俺は我慢した。
そりゃそうだろ？　リールが一生懸命に説明をしてくれているんだ。これを邪魔しようなんて思う奴は鬼か悪魔だ。

で、一通りの説明が終わり、俺は聞いたルールを改めて反芻することにする。
まず――いや、まずっていうか、これ一つしか公式ルールとやらはなかった。
「ハンプティ？」「ダンプティ！」のかけ合いでスタート。
どうだ？　凄くシンプルだろ？
ではでは、早速始めたいと思う。ちなみに、最初の「ハンプティ？」は挑発の意が込められているらしく、チャンピオンが言う台詞らしい。なので、自称一番だというリールがそれを言うことになった。
それでは改めまして……
「ハンプティ？」
「ダンプティ！」
戦いの火蓋が切って落とされた。
カカカカカカカカカカカカ――と、ペンの走る音のみが空間を支配する。
俺はまずだ円を書いた。そこに手と足を書き足し、最後に少しリアルな顔を書こうとしたところで――
「できたぁ！」
リールがカチャリとペンを置いた。
……おいおい、嘘だろ？　リールの描くハンプティさんは、先生が思わず引くほどのできらしい。俺のハンプティさんなんて、どこぞのエセピカソが書いたような酷い状態だぞ？　それを上回るスピードで引くほどの絵なんて書き上げられるはずがな――
「うわ……っ！」
ごめん。前言撤回。書けてます。引くほどの絵が書けてます。劇画タッチのハンプティさんが紙の中で躍動しています。
これは……完敗だ。

「……リール、負けたよ……」
「ほんと？　えっへん！　私、凄いでしょう！」
「ああ、凄いよ。もう凄すぎて神だよ」
そう言ってから、俺はもう一度リールの描いたハンプティさんを眺める。
……凄すぎる。リール、将来は画家かな？　もし画家になりたいって言ったら、俺は迷わず支援することだろう。
「ああ楽しかった！　ジュースジュース！」
しかし、秘められた才能を爆発させたリール本人は、絵に興味なんてないと言わんばかりに家の中へと戻ってしまった。きっと、俺を負かしたから満足したんだろうな。
とその時――
「おーい、何でも屋の兄ちゃーん！」
数人の子供の声がこだましてきた。ちぇ、またあれかよ。いい加減にしろよな、まったく……。
俺はため息をつきながら、声のした方を向く。
すると、予想通りの面子がこちらに向かってきていた。全員がNとYの組み合わさった野球帽を被っていて、手にはバッドとグローブ。まあ言うまでもなく、近くの空き地で草野球をしているガキ集団だ。
ここのところ、二日に一回くらいのペースでやってきてくれるお得意さんだ。しかし、ここのお得意さんには正直なりたくない。だってさ、
「ボール取ってきて！」
これぱっかり。しかも報酬だって全然なんだぜ……。
「はい、A・ロッドのサイン入りボール」
「はいはい、こんなショボいのいらな――って、えっ！　何で？　いつもはアメ玉とかのくせに！」
俺は手渡されたサイン入りボールを食い入るように見つめる。
「サインは俺が書いたんだっ！」

「っざけんなぁあああぁぁあぁあああぁぁあぁあああぁ――っ！」
俺は思わずそのボールをはるか遠くへ投げてしまった。
それを見たガキどもが目を大きく見開いて、
「……今度、試合でライトやってよ」
などと抜かしてきた。俺は当然断った。……って、あれ？　こいつら、いまのボールで野球すればよかったんじゃないの？　……バカ野郎っ、それを指摘するのは無粋ってもんだぜ……。
「それより、ほんとに依頼したいって言うなら、もっとちゃんとした報酬よこせっての。こっちは真面目な仕事でやってんだぞ？　これで食ってるんだからな？　お前らそこんとこ分かってんのか？」
「……分かったよ。兄ちゃんが絶対納得する報酬をあげるよ」
言いながら、リーダー格のガキはポケットから何かを取り出した。どうやら折りたたまれた紙のようだ。それをそのまま俺に渡してくる。
なんだ？　土地の権利書でも持ってきたか。それならなんでもしてやるぞ。
――人殺しでもな。
なんて考えながら、俺はその紙を開く。
「うわ……っ！」
土地の権利書じゃなかったです。ハンプティさんでした。さっきリールが書いた奴と同じレベルのハンプティさんでした。――いや、これはレベルが同じっていうよりも、
「……リールが書いた奴じゃないか？」
尋ねると、ガキどもが頷く。
「なんでそんなもん持ってんだよ？」
「あれ？　リールちゃんから聞いてない？　ハンプティの早書きが初等部で流行ってるんだぜ？」
「あ、いや、それはさっき聞いたけど……そうじゃなくて、なんでこのハンプティをお前が持ってたんだ？　って意味で俺は聞いたんだよ」

「ああそれはね、今日、リールちゃんからもらったんだ。それで、リールちゃんの兄ちゃんはリールちゃんのことが好きだってリールちゃんが言ってたからこれあげればきっと依頼を……って、に、兄ちゃん……？」

俺の放った殺気を感じたのだろうか。リーダー格のガキは言葉を途中でやめた。

実に賢明な判断だ。

何が……何がリールちゃんじゃボケェェ――ッ！　前々から気になってたけど、今日は一段とリールちゃんリールちゃん連呼しすぎじゃアホがぁっ！　しかもリールにもらっただとぉ？　こいつ何様だ？　リールにプレゼントをもらう？　笑わせるな！　一世紀早いわ！

……いやしかし、果たしてこのハンプティさんを、リールがコイツに渡したプレゼントだと解釈してもいいのだろうか？

俺は躍動するハンプティさんを眺める。

リールはこのハンプティさんを量産することができる。ということはだ、『あー、このハンプティさん邪魔ぁ、チョー邪魔ぁ。でも私が書いた奴だしぃ、捨てんのもったいなくない？　あー誰か処分してくんないかなぁ？　――あ、そうだぁ。あの野球バカに渡しちゃえばいいじゃん！　あいつなんてぇ、私にとっては焼却炉みたいな存在だしぃ。キャハハハハハッ！』てな具合で、リールがコイツに渡した可能性だってあるよな？　いや、一〇〇パーそうに決まってるっ！　ふひひっ！　リールの中でお前の存在は焼却炉にすぎないんだよ！　いい気味だなぁ！

「ハハハハハハハハハハハハーッ！」

「……に、兄ちゃん？」

くそっ！　心の声が漏れた……っ！

「な、な～に、ハハハハハッ、笑いでエクササイズって奴さ。ヒーハーッ！」

「ふ、ふーん……」

ええいっ！　ハンプティさんを見るような目で俺を見るなーっ！
「ほ、ほら！　さっさとボール取りに行くぞ！　もうタダでいいから！」
ホントはタダなんてありえないんだが、この気まずい空間から脱出するにはこうするしかなかったんだ。

1章―6

ああ、怖かった……。
なんでいっつもあの家にボール入るんだよ。なんだっけ？　盆栽って奴を毎回毎回ものの見事に砕けさせてるもんなぁ。てかさ、あの人も盆栽の場所変えるとかさ、色々打つ手はあるじゃんか。学習しろよな、ったく。
と心で愚痴りながら、俺は家に帰ろうとしているわけだ。というより、もう家の前だ。でも家にはまだ入らない。
俺は『ストルス雑務店』のカウンターに腰かける。それから、夕闇が訪れた始めた空を見上げた。
また夜が来る。俺の本業の時間がまた近づいて来たんだ。
そう考えると、少しばかりの悲しさと寂しさが俺を包み込んだ。けど、こんな感覚にも慣れたもんだ。
さてと、やりますか。この静かな仕事場じゃないと安心してできないことを。
話を誰かに聞かれるわけにはいかないからな。
俺は携帯を取り出して、ボイスチェンジャーを取りつける。
何、仲介屋への電話って奴さ。
話は二、三分ほどで終わった。
ターゲットの再確認くらいだからな。
これで表でやることは終わった。あとは家に入って夕食だ。
夜はスリイナが作りに来てくれないから、夕食作りは必然的に俺がやることになる。別に面倒だとは思わない。たださ、俺のもの凄い下手くそな料理をリールに食わせるってのが、ねえ……？
けどさ、リールが料理を作れるってわけでもないからな。
だから結局は、俺が作るしかないわけよ。
携帯からボイスチェンジャーを外したのち、俺は家に入った。
リビングへ向かうと、テーブルに教科書ノートを広げてリールが

宿題をしていた。
「あ、フィー兄ちゃんおかえり！」
リールはくりっとした目を細めてそう言った。
俺は嬉しく感じる反面、悲しくも思えてきた。
いつもだ。リールはいつも、父さんも母さんもいない家で――一人きりで待ってくれている。
ホントなら俺がそう言ってやりたい。俺がリールを迎えてやりたい。
「フィー兄ちゃん？　どうかしたの？　ぼーっとしてるよ？」
「あ、いや……なんでも」
まあ結局、俺がリールを迎えてやるなんてことは、夢のまた夢だ。だってそうだろ？　俺がリールを迎えるってことは、端的に言って俺はニートってことだろ？
それはちょっと好ましくない展開だ。俺の夢は、っていうより生きる理由は、リールに何不自由ない生活をさせ続けること。だからニートじゃいかんのだ。
俺はただただひたすらに、馬車馬のように働けばいいんだ。
あ、そう考えると、やっぱりリールにはこの状態で居てもらうのが一番いいのかもしれない。何せ帰ってくるたびに、俺はこうして癒されるわけだからな。それにあれだ、家にいてもらうのが一番安心できるしな。
けれど、リールにしてみればやっぱり退屈なんだろうな。俺が雑務で外に出てる時はずっと一人なわけだし。……さっきのハンプティさん早書き対決の時とか、もの凄く楽しそうにしてたもんな……
……よし、笑わせよう！
迎えてやれない代わりというか、とにかくリールを楽しませてやろうという衝動に駆られた俺は、
「マンションも……ダイワハウチュ」
この前テレビでやってた世界の面白ＣＭ集の中で、特に印象に残ったＣＭの決め台詞を言ってみた。

「……」
リールが無表情になった。
お、俺は一体何を失敗したんだぁあああぁあああぁあああああぁあああああぁあぁ！　ＣＭのチョイスを間違えたのか！　ヤベッ、これ超恥ずかしい！　死にたい！　袋があったら被りたい！　――あ、袋あった！
俺は大急ぎで袋を被る。
と、リールの笑い声が聞こえてきた。
……よかったぁ、笑顔になってくれたみたいだ。いやしかし、リールのツボがまったく分からないな。でも、袋を被るだけで笑顔になってくれるっていうのなら、俺はずっと袋を被っていても構わない。
あ、ただし、寝るときは勘弁してもらわないとな。窒息するかも、しんないか……いや……いまでも十分に……ち、窒息死できるな、これ。……それに、いま思えば、リールの顔が……見れないや、ないかい……。やっぱり袋、いますぐご勘弁っ！
俺はＴシャツでも破るかのように、顔にまとわりついていたビニールを破った。
ありがたいことに、リールはそれにも笑ってくれた。
俺の意図とはだいぶ違う結末となってしまったわけだが、まあ――結果オーライって奴だな。
さて、リールが笑顔になってくれたところで、夕食を作るとしますか。俺も腹減ってきたしな。きっとリールもお腹ぺこぺこのはずだ。
「ごめんなリール。ちょっと余計なことしちゃってさ。いますぐ夕食作るからな」
「なんで謝るの？　面白かったからいいよ！　でも、フィー兄ちゃんの言うとおりお腹は空いてるから、なるべく早くねっ！」
天使もびっくりするであろう可愛いハニカミ。
「お、おう！　分かったぜ！」

俺はマッハに相当すると思われるスピードでキッチンに移動し冷蔵庫を覗く。――ハンバーグでいいか。焼くだけだし。
というわけで一〇分後。
我が家の食卓にはハンバーグとつけ合せのコーンとポテト、それに加えてパンとコーンポタージュという、どこまでも普通な雰囲気を持つ料理たちが乗っかっていた。
ちなみに、コーンポタージュは粉末にお湯を注いだだけだ！　……別に威張って言うことじゃないな、ごめん。
俺の対面に座っているリールはこれらを見て、
「美味しそう！」
だってさ。こんな平凡な料理に対しても、リールは目を輝かせてくれる。
俺はホッとしたね。リールにそう言ってもらえれば、これ以上ない喜びだからな。
「よし、じゃあ食うか」
「うん！」
「いただきます」
「いただきま～すっ！」
俺はまず、メインであるハンバーグに手をつける。どうやらリールもハンバーグのようだ。俺たち兄妹はほぼ同じタイミングで、口にハンバーグを放り込んだ。
……んー、まあまあだな。もうちょっと焼いてよかったかもしれない。
そう思いながら、俺はリールの顔を窺う。俺の味覚なんかよりも、リールに合ったかどうかが重要なんだ。
「まあまあだね。やっぱりスリイナ姉ちゃんの方が美味しいよ」
「さ、左様でござるか……」
うぅ……毎度のことながら、結構な毒舌だぜ。
「……ご、ごめんな。兄ちゃん、いつになっても料理上手くならなくて……」

「ううん、そんなのどうでもいいんだよ。私はフィー兄ちゃんと一緒に、こうやって食べられるだけで十分だもん」
「……り、リールぅ……」
俺は思わず感極まる。――やべ、涙出そう。
俺は必死に、必死にこらえてみた。……だが、残念ながらフィーニットダムは決壊してしまった。
――いま苦笑いした奴、あとで八つ裂きにしてやる。
「フィ、フィー兄ちゃん……？」
急いで涙を拭ってみたが、どうやら見られてしまったようだ。ああ、恥ずかしい……。でもさ、いまのはしょうがないよな？　泣くなという方が無理って話だ。
だっていまの言葉は、俺を必要としてくれてるってことだろ？俺が一方的にリールを必要としてるってことじゃなくて、リールも俺を必要としてくれてるってことだろ？
それは俺にとって――何よりも嬉しい最高の言葉だ。
今後の人生において、これを上回る感動はないんじゃないかと思うほどにな。
「リール、ありがとな……」
堕ちて破綻している俺は、いまの言葉だけで十分すぎるほどに救われたよ。

1章―7

楽しい時間はすぐに終わる。
それは誰にとっても例外ではないだろう。だから俺にも当てはまるんだ。
今日も俺は、リールが寝静まったのを確認してから都会の方にやってきた。ターゲットというのは、どうしてもこっちにいるものなんだ。
来るのが面倒なんだよなぁ。片道一時間近くかかるからさ。でも、それに見合った報酬があるし、何より住んでる場所から離れてるってのは結構重要なことだ。捕まるわけにはいかないからな。
さて、今日はどこから狙おうか。といっても、やはり上からになるわけなんだけどな。
俺はターゲットが泊まっているホテルの反対側のビルの屋上へ向かった。
ああ、寒い。やっぱ屋上寒い。でも俺だって学習はしている。今日は長袖長ズボンで来たんだ。昨日よりはマシだ。でもまだ寒い。屋上は手ごわいなー。
とふざけてもいられない。今日は昨日のみたいに、決まった時間にターゲットが来るわけじゃない。ターゲットはもう反対側のホテルの一室にいるんだ。だからタイミングが命。窓の近くに来たところを一撃で仕留めなきゃいけない。
難易度は昨日より難しいと思う。
俺はギターケースを開けて、さっそく狙撃の用意を始める。
まず三脚を組み立てて、次に銃を組み立てて、この二つをドッキングさせて固定。それから、ターゲットの泊まっている部屋に銃口を向けて、最後にスコープの標準と倍率を合わせる。
これでとりあえずは準備完了。
あとはひたすらスコープを覗いて、ターゲットが窓際に来るのを

待つだけ。カーテンが閉まってるから、ホントにタイミング命だ。
……ああ、緊張してきた。
ターゲットが来る、来ない、来る、来ない、来る、来ないと引き金に指をかけてはやめ、かけてはやめを繰り返していると――スコープで捉えているカーテンに人影が映った。
が、俺は引き金を引けなかった。
……くっ、タイミングを取り損ねた。……けど、ターゲットの部屋の構造を思い返す限り、ターゲットはいま、ベッドからどこかに移動したみたいなんだ。つまり、ターゲットはもう一度絶対に、カーテンの前を通るはずだ。じゃないとベッドに戻れないからな。
だから、まだ大丈夫。次こそは――狙い撃つ。
神経を研ぎ澄ましてタイミングを計っていると、こんな時に限ってアイツが、毎度毎度俺を混乱させるアイツがやってきやがった……。
こんなことしていいのか？
こんなことしてなんになるんだ？
こんなことして正しいのか？
こんなことして誰か悲しまないか？
こんなことするのは間違ってると思わないのか？
こんなこと――うるさい！　邪魔すんな！　このタイミングで出てくるな！
……うるさい、か？　この声をうるさい呼ばわりするのか？　お前を止めようとしているこの声をうるさい呼ばわりするのか？　――俺もだいぶ堕ちたなぁ。いいのか？　……父さんと母さんが悲しむぞ？
……うるさい。リールのためだ……。
そのリールはどうだ？　俺がこんなことをしていると知ったら……どうなるかな？　どう思うかな？　――きっと嫌われるぞ？
そんなの知られなきゃいい。巻き込まなければいい。俺はそんなヘマはしない！

そうか、さすがは俺。でもこの世の中そう上手いこ――黙れ消えろ！

瞬間――大気を切り裂く破裂音。

銃口からのろしのような煙が上がり、スコープを覗いていた俺の視界が真っ赤になった。

先ほどまでベージュっぽい色合いだったホテルのカーテンは、最初から真紅だったのではと思うほどに、それほどまでに鮮やかな赤に染まった。

……俺はまた、人を殺した。あの出血量なら確実だ。もしかしたら首から上が消し飛んでるかもしれない。

今回はカーテンのおかげで、吐き気は襲ってこなかった。

だから早々に立ち去ろうと思う。俺にはうろたえてる暇なんてないんだ。

俺は銃を、三脚を、たったいま人を殺した奴とは思えない手際のよさで片付ける。

一分も経たずに片付け終わると、俺は非常階段を駆け下りる。

難易度が高かった分、逃げるのは昨日よりもずいぶん楽だ。相手は一般人だったからな。黒服も何もいない。

そうして、何ごともなく地上にたどり着いた俺は昨日と――いつもと同じように都会の風景へと溶け込んだ。

もちろん、バンドの練習帰りのガキとして。

◎

我が家に無事到着。

時間は昨日より早い。けど、高校生が帰ってくる時間とは思えないわけなんだがな。

玄関から静かに足を踏み入れると、我が家の落ち着いた匂い。これほど安心するものもない。

昨日と同じようにまず自分の部屋へ行き、ギターケースを隠す。

それから、リールの顔を拝みに行く。どれどれ、癒しをもらおうかねえ。
ホップ抜き足、ステップ差し足、ジャンプ忍び足を駆使して俺はリールの部屋に近づく。ドアの前に到達し、俺は「さてさて、うへへ」と開けようとして――ドアがちょっとだけ開いていることに気づく。
「ん？」
怪訝に思っていると、部屋の中から泣き声が聞こえてきた。
うわーんっていう大泣きじゃなくて、すすり泣くような、深夜に聞くにはちょっと怖い声が聞こえてきた。
しかしそれは当然、幽霊なんていう存在し得ないものの声じゃない。
紛れもなく、リールの声だ。
俺は部屋に入るべきかどうか悩んで――入ることにした。ちょっとだけ開いているドアを二回ノックして、
「……リール、どうした？」
しかし、そう声をかけても返事はなく、俺は勝手ながらドアを大きく開けて部屋の中へ。
すると、リールはベッドに座りながら泣いていた。
「どうした？　何かあったのか？」
俺はリールのすぐ近くまで寄ったのち、しゃがみながら優しくそう尋ねた。
「うぅ……えぐっ……ふぃ、フィー兄ちゃん……っ！」
ドサッと、リールが俺に抱きついてきた。
いつもの俺なら嬉しいなぁと顔がほころぶのだろうが、いまはまったくほころばなかった。俺にだってそういう心ぐらいは残ってる。
「ホントに、どうした……？」
そう尋ねるしかなかった。赤ちゃんでもあやすかのようにリールの背中をぽんぽんと優しく叩きながら、俺はそう尋ねるしかなかった。

「……あのね、さっきトイレに起きて……戻ってくる途中に、フィー兄ちゃん寝てるかなって思って、部屋を覗いたらね、フィー兄ちゃんが居なくて……それから家の中全部探したけど居なかったの……それで……」
やっと紡いでくれた言葉を聞いて、俺は顔をしかめた。
俺のせいじゃないか……リールが泣いてるの、俺のせいじゃないかよ……。何やってんだ、俺は……。リールを悲しませるのは、絶対のタブーなのに……。
早く安心させてやらないと……でもどうやって？
人を殺しに行ってたんだ、ごめんな。
なんて正直に言えるわけがない。そうなれば当然、嘘をつくしかない。リールに嘘をつくのは……嫌だけど、でも……そうするしかない。
「……ごめんな。目が覚めたから、ちょっと散歩に行ってただけだ。だから心配すんな。もう絶対に居なくならないからな」
言いながら、俺はリールの小さな背中をさする。
体の震えが弱くなったことから察するに、リールはだいぶ落ち着きを取り戻してきたみたいだ。
「……ほんと？」
「ホントにホント、絶対居なくならない。だから今日はもう寝ような？」
「うん……」
満足したように頷くと、リールは自分でベッドに横たわった。
俺はリールの足元にあるタオルケットをかけてやった。
「じゃあリール、おやすみ」
「あ、フィー兄ちゃん、待って……」
部屋から出ようとした俺に、リールが声をかけてきた。
「ん、なんだ？」
「……あのねフィー兄ちゃん、今日……一緒に寝て……」
「えっ？」

いきなり言われてびっくりした。と同時に、飛び跳ねたいほどの嬉しさを覚えた。
で、でもなぁ、嬉しいんだけど、ホントにもの凄く嬉しいんだけど……い、一緒はちょっとなぁ……さすがに恥ずかしいよなぁ。
「フィー兄ちゃん……ダメ？」
上目遣いはダメーッ！　断れなくなっちゃうよぉ！　――って絶対ダメだぞ俺！　耐えろ！　耐え抜くんだーっ！
「あ、あのさリール。俺ってば汗掻いたから、これからちょっとシャワー浴びてくるんだけど、だからそのあれだ……どうせ、俺が来る前に寝てるだろ？」
リールの顔を見ると、いつでも寝れそうな目をしていた。まぶたを必死に開けて抵抗している感じだ。
「ま、待ってるもん……」
はっきりいってもう寝そうだ。……きっと、俺が目の前に現れて安心したんだろうな。
「リール、無理しちゃダメだぞ？　寝れる時に寝ないと美人になれないぞ？」
「いいもん。美人になれなくても……フィー兄ちゃんのこと、ずっと待ってる、もん……」
だとさ。しぶといですこと。まあ、リールの場合、いま寝なくたって美人ルートは確定なんだけどな。
――しっかし、これはどうしたもんか。ちょっとまいっ……
あっ！　ひらめいたっ！
「リール！　俺はここに自分のベッドを持ってくる――のは無理だから、まあ……床で寝るから、それならどうだ？　リールが明日の朝目覚めた時に俺がここにいればいいだろ？　それとも、やっぱ一緒じゃなきゃダメか？」
「……じゃ……それで、いいぃ……」
お眠りになられました。
さてと、じゃあまずはシャワーを浴びてきますか。んで、そのあ

とに俺はかけ布団だけ持ってリールの部屋へ。
と、このあと俺は、その通りに動いたのち眠りについた。
なんか、最近では一番にぎやかな日だったかもしれないな、今日。

2章―1

「ぐぬぅ……！」

わたくしめことフィーニットの朝は、奇声を上げることから始まる。

奇声の理由は腹部の圧迫。

目を開けるまでもない。みなさんだってお分かりでしょう？

だってわたくしめは昨日、いや、寝たのは一時過ぎでしたから今日ですね。というわけで今日、わたくしめは自分の妹の部屋で寝たのですよ。――ということは間違いようがないでしょう？

わたくしめのお腹の上にいる可愛らしい人物の名前。

それをみんなで一緒に呼びましょう。せ～のっ！

「リールぅ……」

寝起きだからでしょうか、心の中のようなテンションで声を張り上げることはできませんでした。

わたくしめは確かめるまでもない答えを確かめるために目を開けようと思います。

さてさて、今日はどんな白いパンツを穿いているので……え？　えっ？　えぇ！

わたくしめの――なんだこの口調！　もういい疲れた！

俺の腹部にいる人物はリールじゃなかった……

「……スリイナ、お前何してんの？」

えへへ、と笑う制服姿のスリイナ。

「えへへ、じゃねえよ。一回どいてくれ。というより、なんでお前なんだ？」

「リールちゃんが一回やってみればって言うから、つい……」

「ついじゃねぇよ、ったく……。どうりでいつもより重いなぁって

思ったんだよ」
そう言うと、スリイナは傷ついたような顔になり、俺からさっさと離れていった。
「お、重かった……？」
スリイナが泣きそうな顔で問いかけてくる。
ああ……めんどい。なんで自業自得の奴を俺が慰めなければならんのだ。……でも確かに、重いっていうのはちょっとストレート過ぎて酷かったか？　……しゃーねえな、それなりの撤回しますよ、すればいいんでしょ。
「いや、重いっていうのはな、あくまでリールと比べての話だ。お前とリールじゃ背丈が違うんだからお前の方が重くて当たり前だろ？　それにあれだ、俺にしてみたらお前なんかまだまだ軽い方だったよ」
はっ！　どうだこのフォロー、完璧だぜ！
それを証拠に、スリイナは顔を素晴らしくにこやかに、それはもう美人の極みといっても差し支えないほどの笑顔を浮かべていた。がしかし――
「ほんと？　軽い？　それってどのくらい？　キャビア何缶分？」
褒められたせいで調子に乗ったらしく、半ば暴走気味に質問してくるスリイナ。キャビア何缶分なんぞ知るか！
俺はうざいと思ったが、無視するとヒートアップすること請け合いなので、超面倒だと思いながらもそれらの質問に答えてやることにした。――ただし、一気にな。
俺は立ち上がり、スリイナに近寄っていく。
スリイナは俺のそんな行動を怒ったと判断したらしく、急に「ごめんねごめんね」と謝り始めてきた。
けど俺はそれを無視！　お前が二度とそんな馬鹿げた質問をしてこないようにするために、俺は心を鬼にするぜ！
俺は一歩一歩、スリイナへ近づいていく。
スリイナが自分から壁際まで下がっていったので、簡単に追い詰

めることができた。
俺はスリイナの体に手を伸ばす。
スリイナが顔を真っ赤にしているが俺は気にしない。
俺は左手でスリイナの太ももの裏を持つ。――あ、柔らかい。右手は背中に回す。――あ、これはブラのヒモですかな？　そしてそのまま持ち上げる。あれだ、いわるゆお姫様抱っこって奴だ。
「いいか？　これがお前が軽いっていう証拠だ！　分かったら、もう二度と軽いかどうかなんてこと、俺に聞くなよ？」
「う、うん……」
うむうむ、分かったのなら降ろそう。
「それよりさ、朝食はできてるんだろうな？　できてるからこそ、俺の上に乗っかってたんだろうな？」
もしできてないのにこんな遊びをしてたっていうのなら、俺はそのスカートをめくってやる。
「できてるよ。じゃあ下いこっか」
スリイナはそう言って、機嫌よさげに部屋から出て行った。
……まったく、空気を読めない子は嫌われるぞスリイナ。そこは『あ、ごめん。まだできてないの……』だろ。そしたら俺が『んだと！　覚悟はできてんだろうな！　それぃ！』　と手を振り上げて、最後にスリイナが『きゃっ！』だろうがよ……。
ま、別にいいんだけどな。スリイナの下着の色は大方予想がつく。
ズバリ白だ。
なぜかって？　あんな純朴お嬢様が黒とかなわけないだろ？　それにさ、昨日スリイナの谷間を拝見した時、下着の色は白だったんだ。だから白だーっ！
――って、俺は朝からなんちゅうことを考えてるんだ！
んー、これはもしかすると、マイケル症候群を発症したのかもしれないな……。末期になると自らの服を引き裂いて全裸で街を闊歩し始めるという恐ろしい病気だ。……ごめんなさい、こんな病気ありません。

なんて冗談はさておく。
リビングに向かうと、スリイナの言うとおり、きちんと朝食が用意されていた。しかも驚くなかれ、今日の朝食はなんと――
フレンチトーストだった。
拍子抜けだ。
昨日よりもだいぶあっさりとした朝食は優雅に終了。
色々準備したのち、父さんと母さんの遺影にいってきますの挨拶をして、俺たちは学校に出発した。
そして学校に到着すると、俺とリールは引き離される。
運命とは残酷なものだ。

2章―2

迎えた放課後である。
たいぶ時間飛んだなぁとか、できれば思わないで欲しい。一年は三六五日もあるのだ。その中に何もない平穏な日がどれだけあると思ってるんだ？　恐らく九割はそんな日だぞ。
で、今日はそういう日だったんだ。お伝えすることなど何もない、平々凡々な日だったんだよ。もっと言えば、今日は『ストルス雑務店』も定休日。ホントに何もない、のんびりとした日なのだ。
あっさりと残酷な運命から解き放たれた俺は、スリイナと一緒に校門の前でリールを待っていた。
「フィー、あのさぁ……」
そんな中、スリイナが口を開いた。
「何だ？」
「明日は土曜日でしょ？」
「そうだな」
「だからね……その、今日、うちに来ない？」
「いいぞ。何もないしな」
「ほんとっ？」
「ああ、今日はホントに何もない日だからな。それにここんところ忙しくてお前の家に全然行けてなかったし。久々にお前の家が見たいってもんだ」
心からそう思う。なんども言っているが、スリイナはお嬢様である。家だってバカみたいにでかいんだ。確実に俺の家の一〇倍はあるだろうな。ちなみに、俺の家は可もなく不可もない普通の大きさの家だ。でもその一〇倍って普通に凄いだろ？　んでもって、そんな家に行きたくないわけがないだろ？
だから俺はあっさりオーケーしたんだ。きっとリールも行きたいと思うだろうしな。

「じゃあ私、迎えを呼ぶね」
スリイナは携帯を取り出して電話をかけ始めた。
これで歩かずに済む。別に家までそんなに離れてないけど、一〇分近く歩きたいか歩きたくないかでいったら、そりゃ歩きたくないよな？
なんて考えていると、初等部の子供たちが校舎から出てきた。
実にいいタイミングだな。さてさて、リールはどこだ～っ！　――あ、いたーっ！
俺は恥ずかしげもなく手を振る。
リールも気づいて手を振り返してくれ……ん？　あれ？　手を振り返してくる人数が明らかに多いんだけど？　一、二、三、四……九人多い。九人……？
――ああ、きっとあいつらだ。全員リールと比べて特徴が乏しいから分かりにくかったが――野球ボーイどもだ。
「よ。ここで一緒になるのは珍しいな」
近づいてきたガキどもに、俺は声をかけた。
「今日もボール入ったら取ってくださいよ？」
「はーい残念でしたぁ！　今日は何でも屋がお休みの日でーすっ！」
俺はしたり顔で事実を告げた。……大人気ないな、俺。
「え？　そうなの？」
「そうなんだよ。お前らが利用し始めたのは三週間ぐらい前からだっけか？　ま、知らなくて無理ないかもな。今日は一ヶ月に一度の定休日だ」
休み少なっ！　って思ったろ？　でも、学校に行きながら、俺たち兄妹が生活をやっていけるぐらい『ストルス雑務店』は稼いでると、スリイナを含めた近所の人たちに思わせるためには、このくらい働かないとダメなんだよ。
なんでそんなことを思わせる必要があるのかって言えば、前も言ったよな？　殺し屋をやってるってことを隠すためだ。
大変って言えば大変だけど、つらいってわけでもないし、哀れみ

はやめてくれよ？
「あーあ、今日は野球できないな……」
「玉拾いがいないと野球できないって、お前らどんだけボールなくす気なんだよっ！」
ガキどもは俺のそんな突っ込みを華麗にスルー。哀愁を漂わせながらトボトボと立ち去っていった。……そんなに野球したいなら部活入れよ。そうすればボールとか盆栽とか気にする必要もなくなって存分にプレーできるだろうによ。――って、そういえばそうだ、お前らなんで草野球で満足してんだよ！
声を大にして尋ねてみたかったが、そこまであいつらに興味があるわけでもない。だから心中のみでの疑問とさせてもらった。あしからずご了承してくれ。
まあ、そんなことより、
「リール、スリイナの家に行くか？　スリイナが誘ってくれたんだけど？」
このことをリールに教えていなかったじゃないか。ま、返事は聞くまでもないけどな。
「うん！　行く行く！」
な？　行きたいに決まってるんだよ。逆に行きたくない奴なんているのかね？
と考えていたその時――
黒塗りの高級車――リムジンって奴が校門前に止まった。フォシルニクス家のお迎えが来たようだ。
運転席のドアが開き、紳士という言葉が似合うおじいさん執事登場。執事さんは俺たちの方まで回ってきて、わざわざドアを開けてくれた。凄いだろ？
「さ、スリイナお嬢様、お友達もどうぞ」
「フィーとリールちゃんからお先にどうぞ」
「いいのか？」
「いいからいいから！」

楽しそうに言うスリイナに背中を押されて、俺とリールはリムジンの中へ。
「広ーいっ！」
はしゃぐリール。別に俺もリールも乗ったのはこれが初めてじゃない。数回乗ったことがある。でも、それでもはしゃぐってこれは。だって、俺もはしゃぎそうだもん。
もうそこら辺の車と全然違う。リールの言うとおり広い。これに尽きる。普通に寝れるもんな。暮らそうと思えば余裕で暮らせると思う。
そして、そんなミニキャンピングカーがついに発進した。目的地はフォシルニクス邸。車だったら二、三分で着くだろう。
だから別にやることはない。のんびりと、このつかの間の贅沢を味わうことにする。
むむ！　残念ながら俺にはやることができた。この座席の感覚はまたいつかしっかりと味わえればそれでいい。いまは――いまはやらなければならないことがあるっ！
それが何かと言えば、ズバリ！　――パンツを見ることだ。
俺の対面に座っているスリイナ。それを見て、朝の答え合わせをしなければならないという使命感に襲われた。みなの者、期待に応えようぞ！
ちなみにいま、スリイナの足はしっかりと閉じられている。無意識下での自動防御といったところだろうか。さすがはお嬢様だ。
だが――だがぁしかしぃ！　こいつはお嬢様である前にちょっとアホなのだ。勉学の部分ではない。いわゆる天然って奴だ。
なので、こう言えば恐らく……
「――スリイナ！　足を開けっ！」
「え？　こ、こう？」
ほほ～い！　やっぱり予想通りだ。早口の命令口調で言えば開くと思ったぜ！
ちなみに色の方も予想通りでした。え？　何かって？　だから白

だよ白っ！
「うぅ、酷いよフィー……」
スリイナは足を内股にしてスカートを押さえつけるように手を置いていた。
こうされてしまっては打つ手なし。完全防御状態だ。――ま、もう意味ないけどな。
「何が酷いんだよ。あんな命令で足開くスリイナだってある意味酷いだろ」
まあ、それを狙ったわけなんだけどな。
「だってぇ……あんなの卑怯だよぉ……」
……な、なんか、スリイナが可愛いぞ。なんだこの気持ちは……。ゾクゾクというか、胸の奥深くで何かが高ぶっている。――ハッ！
まさかSへの覚醒か！　この状況を楽しく感じるのは、そういうことなのかぁ！　……で、でも俺は！　俺は自称ニュートラルなんでそこんとこよろしくぅーっ！
「じゃあお前も俺にやり返せばいいだろ？　確かにいまのは俺も悪かったかもしれないからな」
ほらな？　俺ってニュートラルだから、今度はマゾになっただろ？
「やり返す？　それってどういう形でもいいの……？」
「いや、そりゃ限度ってもんをちゃんと設けてくれよ？　あと、痛いのはヤダぞ？」
あら、これはマゾあるまじき発言だな。でもいいんだ。だって俺はニュートラル。
「そんなことしないよ。でもそれ以外ならなんでもいい？」
「まあな……とりあえず体に害がなきゃなんだっていいよ。ほら、今日は休みだけど、明日からは仕事を再開するんだからな」
怪我して働けなくなるとホントに困るからな。
「そうだよね……じゃあ、害はないけど、でも強烈な仕返しを考えておくからね」
「へいへい、せいぜい楽しみにしておきますよ」

吐き捨てるように言ったのち、俺はリールを見た。
リールは縦長の座席に横たわってゴロゴロとしていた。なんて愛らしいんだ！　そして白のパンツが見えているじゃないか！　なんたる幸運だ！　ありがたやぁありがたやぁ！
「フィー……」
横から死んだ魚を見るような視線が突き刺さってきた。
「な、何ドン引きしてんだよ！　いいだろ別に！　スリイナだって目の前にパンツがあったら見るだろ？　そうだ、俺の見せてやるよ。さっきのお返しだ」
「み、見せなくていいよぉ！　フィーのバカッ！」
怒っているからなのか、それとも恥ずかしいからなのか、とにかくスリイナは顔を真っ赤にしていた。
これ以上からかうのはちょっと危険と判断し、俺はお口にチャックを施した。
さあ、どうでしたでしょうか！　リムジンという限られた空間をどれだけ愉快なステージへ変えられるかにチャレンジした今回！
スカートの中身当て！
座席のふかふかを存分に堪能！
リムジンの楽しみ方は――人それぞれさっ！
とまあ、急にまとめに入った理由は、リムジンがフォシルニクス邸に着いたからである。

2章―3

リムジンがフォシルニクス邸に到着した。
やっぱり車はいいな。早いし便利だ。父さんが死んでからは車に乗れなくなったからさ、痛いほど分かるよ。この時代は車がないとダメだってことがな。
とか思っていると、執事さんがドアを開けてくれた。スリイナが最初に降りて、俺、リールの順だ。
降りればそこは、まるでホテルの入り口。しかも、スリイナが帰ってきたからだろうか、出迎えが結構いる。まさにＶＩＰがホテルにやってきた時のようだ。
中に入ればエントランスホール。てか、受付がないだけでホテルだね、ここ。
ホント久々に来たので、俺は首を右往左往させてお屋敷の中を見回す。鹿の首のはく製とか、それっぽいモノがたくさん飾られている。
「やっぱ凄いなスリイナの家は……ってあれ？」
スリイナに声をかけようとして、スリイナがいなくなっていることに気づく。
「スリイナ姉ちゃんはお着替えだって」
どうやら、俺が色んなモノに目を奪われているうちに、現実では状況が変化していたらしい。
「じゃあ、俺たちはどうすれば……」
精神と時の部屋から出た時に近い感覚に襲われた俺は、別の意味で右往左往。
「こちらへどうぞ」
そんな俺に助け舟の如く、メイドさんが素晴らしい笑顔とともに声をかけてくれた。
この家のメイドさんの格好は、紺と白を基調とした、いわゆるク

ラシックスタイル。しかしながら、それを着ているメイドさんが中々に可愛いお人だ。……俺のメイドさんになってはくれないだろうか？

妄想にふける俺と兄のそんな妄想を知る由もないリールは、清楚で可憐なメイドさんのあとに続いて奥へと進んでいく。

そうして案内された場所は、前にも通されたことがある客間だった。客間なのにうちのリビングよりもはるかに広いという、庶民にとっては存在するだけで嫌味を覚えさせられる空間だ。

俺とリールは、その空間の中央付近に鎮座する高級そうなソファに腰かけるよう促される。お言葉に甘えてリールと一緒に座ると、計ったようなタイミングで紅茶が出てきた。

味はなんだろうかと考えながら、俺は一口飲む。

「な……っ！」

俺は雷に打たれた避雷針の気分になった。

……れ、レモンティーだと！　なぜ俺の好みを知っている？　――だ、だとすれば、リールのはミルクティーか！

俺はリールの持つティーカップを覗き込む。

――レモンティーやん。……くそっ、サイコメトラーがいるんじゃないかという妙な深読みしてしまった俺がちょっと恥ずかしいじゃないか……。

一人で頬を染めながら、俺は新たなる疑問を抱き始める。

……そういえば、これはインスタントなのか？　いや、この家にはインスタントなんてもの自体が存在しないだろ。いや、もしかしたらその思い込みを利用して、実はインスタントを……いや、逆にそこまでの深読みをさらに読んで、あえて高級なものを出しているのではないか？　けどその逆も……。

と思考がカオスしかけたところに、

「フィー、どうしたの？」

スリイナの声が届いた。――ちょうどいい。インスタントなのかそうでないのか、この際スリイナに聞いてしまえ。

「あのさこの……」
連ねていくはずだった俺の言葉は、序盤も序盤で止まってしまった。なんでかって？　端的に言うと……思わず目を奪われたんだ。
制服じゃないスリイナを見たのがかなり久々ということもあったからか……いや、例え毎日私服姿を見ていたとしても、これには目を奪われたことだろう。
スリイナの格好は白の長袖Tシャツに黒のベスト、下はデニムのホットパンツ。ニーソとかは穿いてなくて、生足が全開である。
俺がじーっと見ていたせいか、スリイナの顔が赤くなる。
「へ、変かな？」
もじもじとした態度でそう聞かれたので、俺は考えてみる。
変かどうか……。別に変ではない。でもスリイナっぽくないと言えばスリイナっぽくない。スリイナは大人しいから、こういう服のイメージがまるでなかった。だって最後に見たスリイナの私服って、白のワンピースだぞ？　それは遠い記憶でもない。ほんの二、三週間前のことだ。
イメージとかけ離れた姿を見せられてどう答えればいいか迷った俺は、思わず最初に見た時の印象を口走ってしまった。
「エロい」
そう言った瞬間、俺のつま先に激痛が走る。リールによるゼロ距離かかと落としを食らったからだ。俺はあまりの痛さに悶える。……ごめん、リール。でもこればっかりはそう思っちゃうって。
悶えながらも、俺はしっかりとスリイナを捉え続ける。
エロい発言のせいか、スリイナの顔は赤に支配されていた。けど着替え直しに行くでもなく、隠すでもなく、ただその場に立っている。顔をよく見れば、恥ずかしさの中に嬉しさが混じってるように見えなくもない。
……やはりスリイナは痴女なのだろうか？　その悩ましい太ももを俺に見せつけ、自分は密かに高揚感を抱いているということなのだろうか？

そこまで考えて、俺は頭を振る。
ないない、ありえない。長年見てきたけど、スリイナはそんな奴じゃない。嬉しさが混じってるように見えたのは俺の見間違いだろうな。
それよりもまず、エロい発言を撤回しないと。何しろリールが大層ご立腹みたいだし。
あとはまあ、スリイナの服装に対するちゃんとした感想も入れてやらないとな。せっかくオシャレしたみたいだしさ。
「ごめんな。エロいは違うよな。エロいじゃなくて、意外だったよ。俺はもっと地味めの服で来るのかと思ってたからさ……でもそれが、その、いきなり大胆なので来たもんだから正直びっくりして……けど別に変ではないし、俺はその格好のお前……好きだけど」
「……好き？」
言葉のチョイスを誤ってしまった！　最後は『いいと思うけど』でシメるべきだった！は、早く好き発言を取り消さないと！
「す、好きっていうのはさ、その格好が似合ってるって意味だ！へ、変な勘違いすんなよなっ！」
あれ？　こんな感じの台詞って、普通、女の方が使うんじゃないか？　……ま、いいか。
「……フィーったら、照れちゃっててて可愛い……」
「う、うっせえ！　照れてなんてねえよ！　スリイナこそ、自分の照れを棚に上げて何言ってやがる！　照れたお前だって可愛いぞ！」
「えっ」
ぎゃあぁあああぁあああぁあああぁあああぁあああぁあああぁ！　俺いまもの凄い変なこと言ったよなぁ！　勢いに任せ過ぎて、もの凄い変なこと言っちまったよなぁーっ！
……ああ、隠れる場所があるのなら、例え肥溜めの中でも構わないぜ……。心底そんな気分だ……。
その後、場は雑談タイムとなったのだが、俺とスリイナは初めて

のお見合いみたいな雰囲気になってしまって、ほとんど会話ができなかった。
リールがいなかったら気まずさで死んでいたかもしれない。
もしかして……あの気まずい空間こそが、スリイナの言ってた仕返しだったのか？
いや、まあ、そう考えるにはあまりにもできすぎだとは思うけど……。
でも仮に……もしそうだったのならば、確かにこれ以上ない強烈な仕返しだったぜ。

2章―4

あ、そういえばレモンティーの正体聞いてない！
フォシルニクス邸からの帰り道、俺はそのことを思い出した――なんてな、嘘だ。
……回りくどいことしてごめんなさい。ちなみにレモンティーは絞ったりして作ったそうです。インスタントじゃなかったです。
うぉっほん。では気を取り直して。
俺たち兄妹はまだスリイナの家だ。まだっていうか、今日は家に帰らない。
泊まってけだそうだ。
さっきまでの妙な雰囲気はなくなったし、明日の仕事は午後からだからということもあって、俺は了承した。リールもその方がよさそうだったからな。
それでいまは夕食中なんだが、やっぱ凄いね。何がって料理に決まってんだけど、もうあれだね、レストラン、最高級のレストラン。
夕食がコースで出てくるって凄くない？
まあ……だからって、雰囲気まで最高級レストランってわけじゃないんだけどな。
「あはははははっ！　フィーニット君！　婿に入りなさい、婿に！」
こう言ったのは、縦長テーブルの先端――お誕生日席って言うのかな？　そこに座っているスリイナの親父さんだ。
親父といってもまだ若い。四〇手前ぐらいだった気がする。交友のあった父さんの話によれば、一代でこの家を築き上げた凄い人らしい。でも性格がちょっとおかしい。
ホント、親父さんは久々に会っても変わらないな……。ま、気にしない気にしない。
「も、もう、お父さんったら……」
と、いまの親父さんの発言を受けて頬を染める、俺の右隣のスリ

イナ。なんかお前、最近頬染めっぱなしだな。――てか、もうちょっと強く否定しろよ。
「でもスリイナはフィーニット君のことが好きなんだろ？　んー？　ほら言ってみなさい、ほら！」
なんだこいつ、最低だな。スリイナは俺のことなんて好きじゃないに決まってんだろ。
「……」
スリイナ！　なんか言え！　勝手に肯定されるぞ！
「そうかそうか！　やっぱりな！」
ほら見たことか！　ここは俺がビシッと言ってやらないと！
「親父さん、俺は婿になんか入りませんからね！」
「ん？　そうか……じゃあしょうがないな……」
なんだ、意外とあっさり……
「うん、しょうがない。スリイナ、お嫁に行きなさい」
んでだよっ！　なぜそうなるっ！
「親父さん、俺は婿には行かないし、お嫁も要りません！　大体なんでそんなに俺とスリイナをくっつけたがるんですか！」
「親として当然だろ？」
当然じゃないだろ！　そこは普通、手放したくない！　だろ！
俺だってリールをお嫁になんてやりたくないし。
……やっぱおかしいや、この人。新しいタイプの親バカとでもいうのか……。
で、スリイナはスリイナでまだ赤くなってうつむいてるし。……いや、もしかしたら落ち込んでるのかもしれないな。俺と結婚とか言われてるんだし。幼なじみと結婚なんて冗談じゃないもんな。
「スリイナ、気にすんな。俺と結婚なんかしなくていいんだから」
冗談でも言うように明るく、けど親父さんに聞かれると面倒そうだから小さく声をかけた。
スリイナが慌ててなんか言おうとしてたけど、別にどうでもいい。たぶん、いや絶対に俺を気遣う言葉が、例えば『私は嫌じゃないよ』

とかいう言葉が飛んでくるはずだからな。もう聞かなくたって分かる。
「ん？　フィーニット君、スリイナになんて声をかけたんだい？　もしや、『あんな親父から言われなくても俺たち結婚するもんな～っ』って――」
「違う！」
「じゃあなんだろうな？　そのあとのスリイナの慌てぶりからすると……『子供は一〇人がいいな～っ』とか――」
「ちげぇよ！」
「一〇人は大変だ。スリイナ、頑張りなさい！」
無視！　無視ですか！　片手で小さくガッツポーズ作んなっ！
「……はい」
はいじゃねぇえええぇぇ！　親父さんが何言ってるか分かってんのか！　ああもう限界だ！　キレていいはず！　俺はキレていいはずだ！
「いいに加減しろよ、アンタ――」
「こら！　言葉遣いがだんだんひどくなってきてるよ。もっと年上を敬いなさい。まったく、これだから最近の若者は……」
「す、すいません……」
出鼻をくじかれてしまった。なんだよ急に……。てか、敬われたいのならもっとしっかりしてくれよ……。
「うんうん、分かればいいんだ。それより、一〇人はちょっと多いんじゃないかな？　五人じゃダメかな？　まあ、孫がいっぱいっていうのは悪くはないんだけどね」
……もういい。もう無視無視。相手にしちゃダメだ。
俺は心を晴らすため、リールと会話することにした。首を左に向ける。
まあ可愛い！　でも心なしか不機嫌な気がする。……いままで相手をしていなかったからかな？　それなら、いまからた～っぷり相手をしてやるからな。

「リール、この――」
「ふんっ！」
いつかみたいに効果音つきでそっぽを向かれた。ど、どど、どどうしよう……。
「あははは、リールちゃんに嫌われたね。スリイナに浮気するからだぞ？」
こ、こんの親父ぃいいぃ！　――いや、ダメダメだ！　これを相手にしちゃダメなんだ。また親父ペースになる。いまはとにかく、リールの機嫌をどうにかしないと……。
「リール。俺はどこにも行かないで、ずっとリールのそばにいるからな。結婚だってしないし、お前を一人になんかしないからな」
そう言うと、リールはこちらに顔を向けてくれた。といっても、様子を窺うような感じで、ちゃんと見てくれてるわけじゃないけど。
でも、これはあと一押しで機嫌を取り戻してくれるはずだ。さて、どんな言葉をかけようか。俺がそう模索していると、
「そうかそうか、やっぱりリールちゃんもフィーニット君のことが好きなのか。あはははっ、モテモテだね？　フィーニッ――」
「そ、そんなんじゃないもん！」
リールが親父さんの台詞を遮る。そして、こちらにチラッとだけ向けていた顔を薄く染めたのち、さっきよりもひねりにひねってそっぽを向いた。一周回って俺の方を向きそうなレベルの逸らし具合だ。
……あぁ……せっかくこっち向かせたのに……お、親父の野郎がいらんこと言うから、リールの奴、恥ずかしがっちゃったじゃんよぉ……。
はあ……なんで俺ばっかりこんな気まずい目に遭わなきゃいけないんだよ……。神様、ちょっとばかし理不尽だぞ……。
……まあ、俺なんかにはこのくらいの罰を与えてこそ、イーブンってことなんだろうけどな。

2章―5

騒がしい食事を終えて、リールがどうにか機嫌を取り戻してくれたところで、俺たちは風呂に入ることにした。

もちろん混浴などではない。そもそも、この家には広い風呂が数ヶ所あるんだ。そんな狭苦しいことをする必要はない。……そりゃ、女の子と狭苦しいことするのは大歓迎だけど、それは倫理に反するってもんだ。――って、人殺しの俺が何言ってんだか。

まあいいや。それで、俺はそのうちの一ヶ所の風呂に一人で来ている。

脱衣所がもの凄く広い。それはもうスパリゾートかってぐらいにな。ロッカーもあるし。まあ、使用人さんたちが多いからなんだろうけどさ。

そんな広い空間で服を脱ぐ。フルになったところで、俺は風呂場へ続く扉を開ける。

お！　そうそう！　この家の風呂はこういうのだったっけな！

眼前に広がる光景を見て、俺のテンションは上がりに上がる。

大浴場と呼んでもいいほどの広さ。そこに低い塀みたいなモノが存在している。

その低い塀みたいなモノには、シャワーがついている。塀の左側に五個、右側にも五個、両側合わせて一〇個という配置。

それとまったく同じ塀がもう一列あるから、シャワーは合計二〇個。つまり、ここで二〇人が体を洗えるってことだよな……。

唖然としながら奥に目を向けると、その二〇人が余裕で入れそうなほどにでかい湯船があった。

この浴場は確か……日本の銭湯というものをモチーフにしていると言っていた。日本すげぇ。いや、これを作るほどの財力を持つあの親父が凄いのか？

ま、どうでもいいや。しっかし、ここを貸しきり状態で使えるっ

て凄いことだよな。
俺は早速、体を洗う。――お、このボディシャンプーいい匂い。やっぱこういうのも高いのかな？　……って、男のこんなシーン見せられてもねえ？
快く割愛させていただきます。俺も分かってるさ！
というわけで、頭も体も洗い終えた俺は、広い湯船に浸かることに。
「うぃ～……」
こんな声も出るさ。だってホモサピエンスだもの。
さてと……風呂から出たら何をしようか？
リールとしゃべって、リールと戯れて、リールと寝るか。いや、寝るのはダメか。
なんて考えていた時だった。
ガララッ！　と脱衣所と風呂場を隔てている引き戸が開く音。
……だ、誰か入ってきた？　……でも一体誰が？　もしや使用人さん？　いや、使用人さんには連絡とか入ってそうだよな。お嬢様たちがお風呂に入りますよって感じにな。それに例えそんな連絡がなかったとしてもだ、俺は脱衣所の入り口に使用中の札を置いておいたし……まあ、仮に札の存在に気づかずとも、脱衣所には俺の脱い服がある。誰かが入ってるっていうのは分かるはずだ……。
だからというかなんというか……使用人さんたちの可能性は限りなくゼロだと思う。だって、そんなおっちょこちょいな使用人さんなんて、この現実世界にはいないと思うし。そもそも使用人さんだとしたら、一人で入ってくるのはおかしいだろ。使用人さんの身分っていうのはさ、風呂に一人きりで入れるほど高いもんじゃないだろうし。まとめてというか、複数人で入るもんだと思う。
でだ、それじゃあいま入ってきたのは一体誰なんだって話ね。
使用人さんを除くと、その数は限られてくる。さらにその中でも、人が風呂に入っているのにも気づかずに入ってくるアホと言えば……スリイナ？

あ、ありえる……。奴の天然ぶりならば、俺がどこの風呂に入ったかを把握していない恐れがある。さらにあの天然ならば、札を置こうがそれに気づかない可能性が十分にある。さらにさらにあの天然ならば、俺の服を見たところで『ここで洗濯するのかな？』としか思わないかもしれない。ちなみにその服というのは制服だが、ここには制服を洗うことができるクリーニングルームがあったはずだ。つまり、あらゆる天然が重なり合い、奴は、スリイナはここにいるということになる。

といっても、まだ仮説だ。

ここからはその人物が見えない。入ってきた時は塀が邪魔で見えなかったし、ソイツはそのあとすぐに体を洗い始めたからな。俺はまだ目視できていないわけなんだ。

なので、俺はソイツが誰なのかを確かめるべく、音もなく湯船から出る。俺はすぐさま身をかがめ、それからほふく前進の体勢になって少しだけ進み、ソイツが体を洗っている列を覗き見た。

「ぶっ！」

思わず噴き出す。やっべ！　俺は急いで顔を引っ込める。

……ふぅ、どうやらバレなかったようだ。――てかそれより……あの、ホントにスリイナだったんだけど。……ヤバかったよ。無防備だったよ、うへへ――じゃないじゃない！

俺はブンブンと頭を振って煩悩を追い払う。

一刻も早くここを出よう。じゃないと俺の理性がなくなりそうだ。別にそれは、スリイナに興味がある、とかじゃないんだからな！目の前に、健全な男子の目の前にあんなものがあったらダメなんだよっ！　もう見るからに柔肌でございましたーっ！　あくまで横からのアングルだったので何も見ることができなかったのが悔しいよぉーっ！

――ってああもう！　思い出しちゃダメぇーっ！

ここからはダビデ像でも考えながら行動することにする。

……ああ、冷静になれてきた。ダビデを考えることによって、

萎えに萎えてきたぞ。
そうして、なんとか沈静化に成功したところで、脱出ミッションを開始する。
俺はいま、奥の湯船の前にほふく前進の状態で待機している。
一方のスリイナは、俺に近い方の塀の内側で体を洗っている。
つまり、スリイナのいる列の外側をほふくで移動すれば、入り口の近くまでは行くことが可能というわけだ。しかし、スリイナの座っている位置が入り口側のため、そこから先に進むのは行くことは不可能。強行突破なんてしようもんなら、全裸と全裸でこんにちはすること請け合いだ。
ということでまず、塀の外側を通って入り口付近まで移動しようと思う。
……風呂場の床を這うっていうのは、あまり気持ちいいもんじゃないな……。
なんてことを考えながらも、俺はなんとか移動完了。
しかし、問題はここからだ。
体を洗い終えたスリイナはどうする？　もちろん立ち上がることだろう。
それが大問題だ。なぜなら、立ち上がられてしまうと塀なんてあってないようなモノへと変貌してしまうからだ。
くそっ！　ヤバイぞ、これはピンチだ……っていうのは冗談だ。
一応乗り切る方法はある。スリイナが湯船に向かって歩き始めるまで、塀にぴったりとくっついていればいいんだ。日本の言葉で言う、灯台デモクラシーって奴だ。身近なことには気づきにくいって意味だよな。
と、スリイナの使用しているシャワーの音が止まった。……よし、決行だ。
いま考えたとおり、俺は塀にぴったりと張りつく。
「――――っ！」
冷たっ！　大理石ってことを忘れてたぜ……っ！

危うく声を発しそうになったが、俺はグッとこらえた。
冷たさが体になじんでいく中、ピチャピチャという足音が俺の耳に入る。どうやら灯台デモクラシーは成功のようだ。
――さて、ここからはもたもたしていられない。スリイナが湯船に向かって歩いているいまこそが、脱出するための最大のチャンスだ。
俺は塀への張りつきを解除し、クラウチングスタートのような状態になる。
そして、そのまま四つんばいで歩いていく。なんで立ち上がらないのかって言えば、まあ……気分だ！
入り口まであと五メートル。
よし、スリイナも気づいていない。いいぞいいぞ～。
この時、俺はスリイナの綺麗な後ろ姿を見ていたが、ダビデ像と相殺しあった結果、普通に見ることができていた。うむ、いい尻だ。
あと四メートル。
ここは、ついさっきまでスリイナが体を洗っていた辺りだ。シャンプーの残りに気をつけない――うわーっ！
バチン！　と体を打ちつけた音が浴場中に響き渡った。
俺は玉を強打してしまい、ただただ悶える。
そうしながら思う。
――夢、ここに潰える。
俺は入り口の方に向けている顔を、恐る恐るスリイナの方へと向けた。
玉を打ちつけた痛さによって出てきた涙で、俺の視界はほとんど何も見えない。それでも、スリイナがあわあわしていることだけは分かった。
そこで、俺の意識は急激に落ちていく。
これ、ヤバイんじゃないかな――玉が……。

2章―6

「……んぁ……」
どうやら、意識が戻ったらしいな。
お、玉が痛くない。俺は安堵に包まれる。
それから、意識を体全体に移動させて、俺は自分が横になっていることに気づく。ベッドがふかふかだから、ここはまだスリイナの家のようだ。
ってことは、そんなに時間は経ってないわけだ。せいぜい夜が更けたぐらいか？
どれ、目を開けるとしますか。
「あ、フィー兄ちゃん起きた！」
リールが起きてる……？　じゃあ朝か？　次の日になっちまったのか？
「……フィー、大丈夫？」
俺と目を合わせないようにしながら、スリイナが聞いてきた。……なんで目を合わせてくれないんだよ。あれは俺じゃなくてスリイナが悪い――って、ああ……そうか。あれってスリイナは、俺が風呂に入ってるってことをまったく知らなかったわけだもんな。
だからスリイナは、俺のことを『覗き』とでも思ってるのかもしれない。
ちゃんと弁解しないと。
でもまず、弁解するよりも先に聞きたいことがある。
「いまはいつだ？」
これが凄く気になる。自分の中の時間は完全に狂ってしまったからな。
「……フィーが倒れてから、一時間くらい経ったかな？」
依然として目を合わせてくれないまま、スリイナが告げた。……あ、そんなもんなの？

気になることがなくなってスッキリした俺は、今度こそ弁解を始める。
「あのさ、スリイナ。……俺はあれ、別に覗きをしたわけじゃないんだぞ……？」
「分かってるよ。あそこはフィーに割り当てられてたお風呂場で、あれは間違って入った私が悪いんでしょ？」
えっ、知ってんの？
「じゃ、じゃあなんで目を合わせてくれないのでしょうか？」
「それは、だって……」
「だって？」
俺が促すと、スリイナは俺からもっと顔を背けた。なんだなんだ？
「服、着てないから……」
「え？　誰が？」
「……フィーが」
俺は慌てて自分の体を見やる。
「ちょ！　なんだこれぇ！」
俺はどこぞの部族よろしく全裸だった。もちろん、あそこはきちんと隠してあった。ただし、タオルが乗っかっているだけという、なんとも危険な状態だったが。
風呂あがりの俺など珍しくもなんともないリールならば普通の態度でいられるだろう。しかし、スリイナはこんなもの見ていられるわけがない。目を逸らしていたのはこれが原因で間違いないだろう。
と考えたところで、俺はふと思う。
確かに、起きている本人の前でなら、こんなもんはまともに見られない。
けれどどうだろう？
裸同然で寝ている美少女が目の前に居たとして、それから目を背けるなんてことができるだろうか？　たぶん、いや絶対にできないよな？
起きてるのなら背けるだろうけど、寝てたらガン見だよな。

俺は、それをいまの状況に当てはめてみる。勘違いして欲しくないのは、俺は別に自分のことを美少年とか言ってるわけじゃないぞ？

裸の女がいれば、例え美少女じゃなくたって、なんだかんだで見ちゃうだろ？　それと同じさ。

だから、俺はリールに聞いてみた。

「なぁ、俺が気絶してる時、スリイナはどうしてた？」

「フィー兄ちゃんのことをね、じーっと見てたよ」

「ほほ～う」

俺は下卑た笑顔でスリイナを見る。

スリイナは「見てないよ見てないよ」と言いながらもみるみる赤くなっていく。

ホントにからかいがいのある奴だ。へへへ、もっとからかってやる。

俺の中のサドの血が目覚め始める。

「そういえばぁ、俺って風呂場で倒れたよな？　その時、俺とスリイナは二人きりだったわけだよなぁ。お前どうした～？」

「す、すぐに人を呼びに行ったよ」

「ほんとか～？　お前、俺を仰向けにしたりしてないよな～？」

「し、してないよ！」

「ほんとにぃ？」

「ほんとだよ！」

俺の目を見据えて言ってくるスリイナ。その目にはうっすら涙が浮かんでいた。

……やれやれ、ここまでだな。

「ごめんごめん、悪かったよ」

言いながら、俺はスリイナの頭をポンポンと二回叩く。

スリイナはそれに対して、「えへへ……」と照れたような、それでいて嬉しそうに笑ってくれた――と同時に、

「ふんっ！」

つまんない！　とでも言うかのように可愛い鳴き声が聞こえたきたので、俺はリールの方を向く。
「リールにも心配かけたな。ごめんごめん」
スリイナにしたこととまったく同じことを、俺はリールにしてやった。
リールもこれだけで「えへへ」と楽しげに笑ってくれて、この場は和やかな雰囲気に落ち着いた。
それはそれで大変よろしい。大変よろしいのだけれど、
「そろそろ服をくれよ……」
ボソッと呟くと、スリイナがスタスタと部屋の外へ駆けていった。一分ほどして戻ってくると、その手に握られていたのは学校の制服――ではなく、執事さんの制服だった。
クリーニングしてくれているらしく、その代わりだそうだ。スリイナは一人っ子だから、男モノの服なんて持ってないだろうしな。
俺は二人をいったん部屋の外へ追い出し、執事さんの制服を着用してみた。
うん、似合わない。とっても似合わないよね。五〇年後も似合わないと思う。
「フィー、まだぁ？」
スリイナのおっとりとした呼びかけ。リールの「早く早くぅ～」という催促も聞こえてくる。
……正直あんまり見せたくないけど、二人を呼び戻さないわけにもいかないしな。
「いいぞ……」
告げた瞬間に扉が開き、まず入ってきたリールが、
「わぁ～！　フィー兄ちゃんかっこいい！」
だそうだ。リールにそう言われるのは素直に嬉しい。けど、リールの目が節穴になってしまったではないかと、俺は心配してしまう。
一方、続けて入ってきたスリイナは、俺をジーッと観察していた。見方によっては呆然とも受け取れる。

ほら見たことか。やっぱ変なんだよ。きっとリールの言葉は、お世辞なんだろう。
「ねえ、フィー……」
ほら来るぜ……。毎日毎日本物の執事を見続けているお嬢様直々の辛口チェックがな。
「私の専属として雇ってもいいかな？」
なんでやねん。甘口過ぎるやろ。
冗談はそれぐらいにしとけよ、と言葉を返そうと思ったが、スリイナの目は本気だった。俺は言葉を発する前に口を閉ざした。
……一体どういうことだ？　この似合わない格好がスリイナのお眼鏡にかなったのだろうか？　それともこの格好、実はイケてるのだろうか？　節穴はリールじゃなくて俺なのか？
「ねえフィー、ダメ？」
色々思考していると、スリイナが再度尋ねてくる。……まずはそれに対しての返事をしておくか。
「はっきりいってダメだ」
「なんで？」
「だってそれってさ、ようはスリイナの面倒を見るってことだろ？」
「簡単に言えばそうだけど……イヤ？　お給料は高くするけど？」
「やだよ、めんどいし」
給料の問題じゃないな。ホントに面倒そうだし、何より幼なじみと主従関係とかちょっと冗談じゃない。……俺はこのままがいいんだ。上も下もない、このままがな。
「め、めんどい……」
スリイナは俺の言葉にショックを受けたらしく、その場にへなへな～としゃがみ込んでしまった。
それを見て、ちょっとかわいそうかな……と思った俺は、今日の夜限定でスリイナの執事もどきになってやった。

2章―7

「ぐふっ！」
一つ目機体の名前のような奇声を上げて、俺は意識を覚醒させた。
ホント、俺は朝、普通には起きれないようだ。
さてさて、今日は一体誰が俺の腹部を圧迫しているんだろうか？
ここんところ、このことを考えるのが朝の初めにすることになってきているな。ま、いいんだけどな。そこそこ楽しいから。
どれ、推理の時間だ。
まず、ここはスリイナの家だ。なら、考えられる選択肢は三つだ。
一、普通にリール。
二、スリイナの家なんだからスリイナ。
三、ここでしか会えない迷惑親父。
さあ、どれだろう。
ま、重さから考えてリールの線は消滅だな。この重さだと……スリイナか？　でもスリイナよりも少し重いような気も……よし、スリイナは消そう。
じゃあ親父さん？　いや、疑問符はいらないはずだ。だって、もう親父さんしかいないじゃん！
そう結論づけた俺は、静かに肺を膨らませていき――
「どけ親父ぃーっ！」
腹部を圧迫されながらも力強く叫んだ。
するとびっくりしたようで、親父さんと思われる人物は俺の上からすぐさま除いた。
さあ、するまでもないけど答え合わせだ。俺は目を開ける。
「……は？」
俺は思わず、意味が分からないときに使う常套句を口にした。
答えがおもいっきり違ったからだ。親父さんでないのはもちろんのこと、リールでもスリイナでもなかった。

じゃあ誰だと思う？
俺は目を開けた時、やられた！　って思った。まさかこんなパターンもあるとはなぁって関心した。ま、もったいぶらずに答えを発表します。
答え――
「おはようございます、フィーニット様」
メイドさん、でした。
「こんなお遊びに付き合ってもらってすいません」
他の仕事だってあるだろうにこんなくだらないことにつき合ってくれたメイドさんに対して、俺はお詫びを申し上げた。
「いえいえ、謝らないでください。楽しかったですよ」
どんな人にも不快感を与えないだろう完璧な笑みを浮かべながら、メイドさんは丁寧に言葉を紡いでくれた。
「ホントにそうですか？」
「はい、とても。童心を思い出しました」
「でも、メイドさんの童心って最近ことですよね？」
まだ確実に若い人だ。俺たちの何個か上ぐらいにしか見えない。
「まあ、お上手ですね」
「いや、それほどでも……」
後頭部を掻き掻きする俺を見て、メイドさんはクスッと笑った。
「それでは仕事がありますので、私はこれで」
そう言ったのち、メイドさんは部屋を出て行った。すると入れ違うように、リールとスリイナと親父さんが部屋へと入ってきた。
「まったくなんなんだフィーニット君は？　うちのメイドにまで手を出して。スリイナとリールちゃんは大切じゃないのかい？」
「何言ってんですか……。仕組んだのは三人でしょ？」
「ちぇ、バレてた……」
リールが悔しそうにしていた。でもねぇ、さすがにこれはねぇ？
「まあまあリールちゃん、悔しがらないで。スリイナ、リールちゃんを朝食の席まで連れてってあげなさい。食べれば悔しさなんてな

くなるさ」
親父さんの言葉に、リールは「朝食食べる～！」と悔しさはどこへやら。ほんと色気より食い気だな。ま、そこがいいんだが。あれなら当分、彼氏とかの心配はいらないだろうからな。
リールは上機嫌になったご様子で、スリイナに連れられていった。
どれどれ、俺も朝食を食べに行こう。そう思いながらベッドから降りて立ち上がると、
「ホントに……スリイナと結婚しないのかい？」
親父さんがいささか真剣に訊ねてきた。けど、真剣だからって返事は変わらない。
またか……と思いながら、俺は返答する。
「しません。大体なんで俺なんですか？」
昨日から気になっていたことをぶつけてみた。さて、どんな返事が返ってくるだろうか。
親父さんは散々「うーん……」と唸ったのち、
「そうだね……生き様が気に入ったから、かな。それにスリイナは君のこと……いやなんでもない。……これは本人が言わないとね」
なんだ？　最後がごにょごにょとしてて聞こえなかったぞ。
ま、いいか。親父さんの理由は聞けたんだし。
でも、俺の生き様って……。
父さんと母さんが死んで、妹を養うために殺しに手を……。いや、親父さんがこのことを知ってるわけがない。てか、知ってたら娘をやろうなんて考えるわけがない。通報してるはずだ。
俺は表向きには、何でも屋を営んで必死に頑張ってる少年で通ってる。
ま、こっちの生き様になら……そんな健気な少年にだったら、娘をやろうって考えるかもしれないな。
……でもな親父さん。俺は全然健気なんかじゃないんだ。
ただの人殺しなんだ。

2章―8

朝食を食べ終わったあと、気がつくと俺たちは昼近くまで雑談してしまっていた。

なんて現代っ子らしくない過ごし方なんだ。俺たちは別にゲームをするわけでもなく、ただただしゃべっていた。

俺たちは、保育園に子供を送っていった際にたまたま仲のいい母親と出会ってしまいそのままファミレスとかに寄って昼近くまでついしゃべってしまった主婦か！

あらあらもうこんな時間～。

この台詞を現実に使うタイミングが来るとは思わなかったぜ。

てなわけで、

「あらあらもうこんな時間～」

気持ちワル！　せめて自分風にアレンジすればよかった！

しかし、リールもスリイナもその気持ち悪さよりも、自分たちがこんなに話していたことに対する驚きの方が強いようだ。

なので、俺の台詞には誰も突っ込みを入れなかった。ふう、助かった。

「じゃ、スリイナ。俺ら帰るわ」

「え？　お昼食べていかないの？」

「ああ、いらん。いま思い出したんだけど、消費期限が迫ってきてる奴があった気がするんだ。捨てるのもったいないしな。それを昼飯にしようと思う」

確かひき肉だった気がする。野菜と一緒に炒めようかな……。

「そっか。確かに無駄にするのはちょっとね。それにそういうのって、全部フィーが働いて得たお金で買ってるんだよね？」

「当たり前だろ」

他に誰かいるか？　もしそんな慈悲深い方がおられたのなら、俺は人殺しにはなっていなかっただろうよ。

「じゃあそれを無駄にしないためにも帰った方がいいかもね」
「そうだ。だから今日は帰るよ。またなスリイナ」
「うん。またね」
こうして、俺とリールはスリイナの家をあとにした。

◎

スリイナの家から俺の家までは、ほんの一〇〇メートル程度。
徒歩にして一分から二分。
もう我が家に到着。
俺は家に入る前に、今日の依頼を確認するためにボックスの中身を確かめる。――お、結構入ってんな。
俺はガサゴソと、それこそホントにくじ引きを引くかのように依頼の書かれた用紙を中から取り出していく。……えーと何々、ボール取り。……あいつら、野球できないとか言ってたけど結局やったんだな。そんで毎度の如く、あの家にボールを入れたわけだ。ま、気が向いたら取ってやるよ。
……次は、えーと、蜂の巣駆除。――うわ来た！　父さんが一番イヤだって言ってた仕事だ！　俺って初めてだけど大丈夫なのかな？　……いや、でもあれだ、結局はなんでも初めてから始まるわけだからな。殺しだってそうだった。これを礎にしないとな。
んで、次はーっと……宛名のない茶封筒？　なんだこれ？
俺は接着部分をビリリと破り、中を覗き見る。
三つ折りになった普通の便箋が入っていたので、俺は取り出し広げて読んでみて――
「……」
ただただ絶句した。
手紙の内容を紹介したいと思う。

▼△

敬愛なるフィーニット・ストルス様へ
あなたのご活躍はお聞きしていますよ。なんでも、いままでに殺した人数は一七人だそうで。いやはや、その若さでそれだけの人を殺しているのというのは大した精神力だ。
私には人を殺す度胸なんてものはないですからね。感服しますよ。
そして、こうしてお手紙を書かせてもらった理由は、その度胸を私のために使っていただきたいからです。
つまりは殺しの依頼をしたいのです。
その実力をぜひともお借りしたい。
早速ですが、このあとにお書きする人物を殺していただきたい。

スリイナ・フォシルニクス

報酬などに関しましては、ターゲットを殺したことを確認したのち、改めてこちらより連絡させていただきます。

▼△

俺の頭はひたすらに真っ白だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4206z/

幼なじみと妹が居たとする。大切なのはどっち？

2011年12月20日18時54分発行